

奈良県御所市

佐田遺跡範囲確認調査報告

— 附 個人住宅建築に伴う平成4年度市内所在遺跡発掘調査報告 —

奈良女子大学蔵書



951002951005

平成5年3月

御所市教育委員会

210.2

95

奈良県御所市

佐田遺跡範囲確認調査報告

— 附 個人住宅建築に伴う平成4年度市内所在遺跡発掘調査報告 —

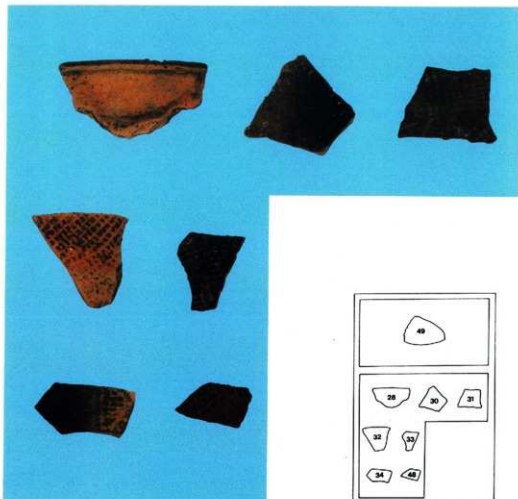
平成5年3月

御所市教育委員会

95100295



佐田遺跡全景（東上空から）



韓式系土器

例 言

1. 本書は平成3・4年度の国庫・県費の補助を受けて、御所市教育委員会が実施した、佐田遺跡範囲確認調査（第4次調査）の報告書である。また、同じく平成4年度の国庫・県費の補助を受けて実施した、市内所在遺跡の緊急発掘調査の成果を併載するものである。
2. 佐田遺跡は『奈良県遺跡地図』第3分冊の「16-D-2」遺跡に相当する。
3. 「17-A-334」遺跡について、特に個別の遺跡名称を付さなかったのは、今回までの調査で遺跡が存在する証左を得ることができなかったためであり、将来それが確認できた時点で命名するべきであると考えている。
4. それぞれの調査期間は次の通りである。

佐田遺跡第4-1次調査	平成4年1月7日～同年2月20日
佐田遺跡第4-2次調査	平成4年12月21日～平成5年2月3日
佐田遺跡第6次調査	平成4年7月8日
「17-A-334」遺跡第2次調査	平成4年10月16日
「17-A-334」遺跡第3次調査	平成5年3月19日
宮古墳周堤部	平成5年2月18日

また、現地調査は、佐田遺跡第6次調査を御所市教育委員会 技術職員・樋田和尊が、その他を、同会・木許 守が担当した。

5. 佐田遺跡第4次の現地調査に際しては、井戸本徳治郎・上口勝秀・梅原 勝・角南義則・小出義弘・嶋谷 進・富永重一・西木実春・西本義雄・橋本武詩・松尾弘海・米田文子の参加、協力を得た。
6. 遺物の整理および本書の作成には、木許のほか、尼了奈美江・藤村藤子・尾上昌子・高田加容子・木村美幸・長越和世・藤井浩子あたり、樋田の協力があつた。
7. 製図は、遺物を尼子が行い、その他を藤村が担当した。
8. 遺物実測図の縮尺は1/3を原則としたが、一部1/2としたものは各挿図に明記した。また、文中の遺物番号は、挿図、観察表、図版とも統一した。
9. 本書の執筆は、第Ⅱ章第1節を藤田が、その他を木許が担当した。また編集は木許が行った。
10. 本書で用いた「北」は特に断らない限り、国土座標（第Ⅵ系）方眼北である。
11. 遺物整理および本書の作成に際して、大和郡山市教育委員会 濱口方朗氏のご教示を得た。記して謝意を表します。
12. 現地調査に際して、土地所有者および届出者である、吉備郁男・古備利次・中西春雄・幸田政幸・北村重治・榎田 弘・中河岸松、北村 明、岩田作夫、北村 清、北村佐市郎、中西和彦・中川龍馬・井上佳之・杉村 節・杉村光代の各氏に御理解・御協力を頂きました。また佐田遺跡第4次調査では、大字佐田・井戸・南郷の皆様にも御協力頂きました。記して、深謝の意を表します。

本文目次

I 佐田遺跡範囲確認調査（第4次調査）	1
1. 位置と既往の調査	1
2. 調査の契機と経過	4
3. 調査の成果	5
(1) 各トレンチの概要	5
① 1区のトレンチ	5
② 2区のトレンチ	6
③ 3区のトレンチ	10
④ 4区のトレンチ	12
(2) 遺物	15
4. まとめ	25
II 平成4年度市内所在遺跡発掘調査報告	42
1. 佐田遺跡第6次調査	42
2. 「17-A-334」遺跡	43
3. 宮山古墳場堤部	45

挿図・表目次

図1 周辺の遺跡分布図 (S. = 1/50,000)	1
図2 調査地位置図 (S. = 1/5,000)	3
図3 トレンチ断面土層図1 (S. = 1/80)	7
図4 トレンチ断面土層図2 (S. = 1/80)	8
図5 トレンチ断面土層図3 (S. = 1/80)	9
図6 第13トレンチ配置図 (S. = 1/400)	11
図7 トレンチ断面土層図4 (S. = 1/80)	折り込み
図8 竪穴住居 平・断面図 (S. = 1/40)	13
図9 トレンチ断面土層図5 (S. = 1/80)	14
図10 出土遺物1 (上段; 第1Tr. 3層, 下段; 第8Tr. 3層 S. = 1/3)	16
図11 出土遺物2 (上段; 第9Tr. 3層, 中段; 15・16・19は第10Tr. 3層 17・18は第10Tr. 4層, 左下; 第11Tr. 3層 S. = 1/3)	18
図12 出土遺物3 (第12Tr. 3層 S. = 1/3)	19
図13 出土遺物4 (上段; 第12Tr. 3層 S. = 1/2, 下段; 第13Tr. 3層 S. = 1/3)	21
図14 出土遺物5 (第13Tr. 3層 S. = 1/3)	22
図15 出土遺物6 (上段; 第13Tr. 3層 S. = 1/2, 中段; 第13Tr. 住居埋土, 下段; 第16Tr. 3層 S. = 1/3)	23
図16 佐田遺跡調査地位置図 (S. = 1/2,500)	41
図17 「17-A-334」遺跡調査地位置図 (S. = 1/5,000)	42
図18 土層断面柱状図 (S. = 1/40)	43
図19 宮山古墳周堤部調査地位置図 (S. = 1/5,000)	44
図20 トレンチ配置図 (S. = 1/400)	45
図21 土層断面図 (S. = 1/80)	45
図22 第1トレンチ包含層出土遺物 (S. = 1/3)	46
表1 佐田遺跡第4次調査出土遺物観察表	27

別添図 佐田遺跡地形と調査地位置

図 版 目 次

- 図版 1 1. 3区から巨勢山古墳群を望む
2. 1区第1トレンチ (北から)
- 図版 2 1. 1区第2トレンチ (北から)
2. 1区第3トレンチ (東から)
- 図版 3 1. 1区第4トレンチ (西から)
2. 1区第5トレンチ (南から)
- 図版 4 1. 1区第6トレンチ 西壁断面
2. 1区第7トレンチ 西壁断面
- 図版 5 1. 2区第8トレンチ (南東から)
2. 2区第8トレンチ 西壁北端断面
- 図版 6 1. 2区第9トレンチ (東から)
2. 2区第10トレンチ (北から)
- 図版 7 1. 2区第11トレンチ (東から)
2. 3区第12トレンチ (北から)
- 図版 8 1. 3区第12トレンチ 遺物出土状況
2. 3区第13トレンチ (北から)
- 図版 9 1. 3区第13トレンチ 竪穴住居検出状況 (東から)
2. 4区第14トレンチ (北から)
- 図版10 1. 4区第15トレンチ (北から)
2. 4区第16トレンチ (北から)
- 図版11 1. 4区第17トレンチ (北西から)
2. 4区第18トレンチ (北から)
- 図版12 佐田遺跡第4次調査出土遺物1 (S、 \approx 1/3)
- 図版13 佐田遺跡第4次調査出土遺物2 (S、 \approx 1/3)
- 図版14 佐田遺跡第4次調査出土遺物3 (S、 \approx 1/3)
- 図版15 佐田遺跡第4次調査出土遺物4 (S、 \approx 1/3)
- 図版16 佐田遺跡第4次調査出土遺物5 (S、 \approx 1/3)
- 図版17 1. 佐田遺跡第6次調査
2. 「17-A-334」遺跡 第2次調査
- 図版18 1. 「17-A-334」遺跡 第3次調査 浄化槽部分
2. 「17-A-334」遺跡 第3次調査 建物基礎部分
- 図版19 1. 宮山古墳周堤部 第1トレンチ (南から)
2. 宮山古墳周堤部 第2トレンチ (西から)
- 図版20 1. 宮山古墳周堤部 第2トレンチ 南壁断面
2. 宮山古墳全景

I 佐田遺跡範囲確認調査（第4次調査）

1. 位置と既往の調査

御所市は、奈良盆地の東南部に位置する。西部には葛城山・金剛山が、南部には巨勢山丘陵が、東部には国見山などがあり、市域の北半部のみが奈良盆地の一面を占める。

佐田遺跡は、標高150～190mの金剛山東麓部に位置する。遺跡が立地する地点は、御所市と五條市の市境となる風の森峠から北に下る谷筋を挟んで、巨勢山丘陵と対峙する位置となるが、この丘

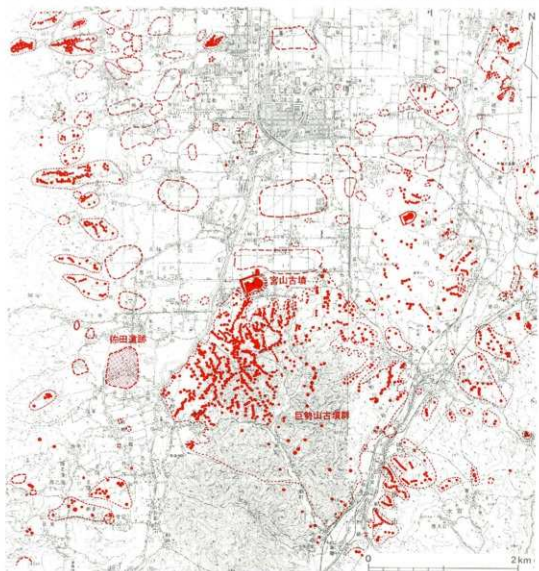


図1. 周辺の遺跡分布図 (S. = 1/50,000)

陵には、総数800基以上と推定される巨勢山古墳群が造営されている（図1）。

また、遺跡は、金剛山に源を発して東流する百百川・竹田川の2本の河川に、南北を挟まれた尾根上に立地する。ただし、概観的にはこの尾根上にもまた東西方向に伸びる数木の谷地形がみられ、微地形としてはこれらの谷地形によって区画されるようである。

さて当遺跡については、平成5年3月現在、7次にわたる調査が行われている。

それらの調査は、今次調査及び第7次調査を除いては、いずれも個人住宅の建築に係る事前の発掘調査であり、その調査の規模も小さいものであった。それぞれの位置関係については図2に示した。

第1～3次調査地は近接する地域に所在する。第1次調査では、耕作上直下で地山がみられ遺物は全く出土しなかった。第2次調査⁽¹²⁾・第3次調査⁽¹³⁾でも土の堆積状況は同様であり、遺物は第2次調査で耕作上内からサヌカイトフレイクが1点出土したのみ、第3次調査で同じく耕作上内から、須恵器小片・磁器小片各1点が出土したのみであった。

第5次調査地⁽¹⁴⁾は今次調査地1区に近接する地点である。耕作土・床土下に遺物包含層（褐黄色砂質土・層厚約30cm）が認められた。この直下は地山となるが、遺構は認められなかった。遺物は布留式期の高杯を1点検出した。

第6次調査地⁽¹⁵⁾は第5次調査地の南に位置する。当該調査は、住宅建築に係る事前調査であったが、既設建物による攪乱層直下で地山となっており、遺構・遺物は全く検出されなかった。

第7次調査⁽¹⁶⁾は葛上中学校の体育館立て替えに伴う事前発掘調査である。調査対象面積は計280㎡であった。当該地では既設体育館の基礎工事による攪乱層が25cmあって、以下最大で120cmの遺物包含層をへて地山に達する。遺物は布留式期から中世の土師器、古墳時代後期の須恵器等があり、それらが混在した状態で出土した。第7次調査においても遺構は認められなかった。このような状況から、出土遺物については西側の高所から流れてきたものと考えられた。

以上のように、当該遺跡では、後述する今次調査で検出したものを除いては、いずれの地点においても遺構は検出されていない。特に遺跡範囲の縁辺部に位置する第1～3次調査地は、調査の結果からも遺跡の中心から外れているのものと判断されてきた。ただし、地点によっては遺物包含層は確実に存在しているのであり、当遺跡の性格についてはなお追究されるべき点が多くあるといえよう。



図2 調査位置図 (S. = 1/5,000)

2. 調査の契機と経過

近年、当市においても農業基盤整備事業が盛んに行われており、平成5年度以降、このような整備事業が、御所市佐田・井戸・南郷地区内で実施されることが計画された。

当該地は、佐田遺跡（「奈良県遺跡地区」第3分冊「16-D-2」）を包括する地域である。同遺跡については、前述のように、平成3年度までに数次の調査が実施されているが、いずれの調査でも遺構が検出されておらず、調査地の3カ所が、近接していることもあり、いずれも遺跡の中心から外れているものと判断されてきた。

そこで、平成2年度までに、このような事業が具体化するのに先立ち、奈良県耕地課および奈良県文化財保存課・御所市農林課・御所市教育委員会の4者による協議を行い、当該遺跡の範囲確認調査を御所市教育委員会が行うことで合意した。また、当該調査は、国庫・県費の補助を受け、平成3年度・同4年度の2カ年をかけて行うものとした。

調査地については、その具体的な調査箇所の選定に際しては、奈良県文化財保存課の指導を得た。また、調査の時期は、現在水田として利用されている土地にトレンチを設定するものであるため、刈り入れ終了後の晩秋以降、冬にかけての時期に行うこととした。

平成3年度は、第4-1次調査として、遺跡範囲の中心に近いと目される、現在の葛上中学校を挟んで東西の2地区で調査を実施した。当該年度は、合計11カ所のトレンチを改定、掘削した。結果的には、後述するように8カ所のトレンチにおいて遺物包含層が認められたものの、いずれのトレンチでも遺構は検出されず、検出された遺物はより高所から流出してきたものと理解された。そこで、平成4年度の第4-2次調査では、遺跡の広がりを確認する目的で、遺跡範囲の南辺部周辺にトレンチを設定し調査を実施することにした。

このような計画に基づいて、当市教育委員会は、第4-1次調査については平成4年1月までに、第4-2次調査については平成4年12月までに、土地所有者の承諾を得、それぞれ発掘調査の通知を奈良県教育委員会に提出した。現地調査は、第4-1次調査は平成4年1月7日に着手、同年2月20日に終了した。第4-2次調査は平成4年12月21日に着手、平成5年2月3日に終了した。調査総面積は、第4-1次調査は約150㎡、第4-2次調査は約200㎡であった。

なお、調査区の名称については、第4-1次調査地の、葛上中学校を挟んで東側を1区、西側を2区とした。また第4-2次調査地は、畦道を挟んで北側を3区、南側を4区とした（図2参照）。トレンチの名称は、第4-1・2次調査を通じての通し番号を新たに付し、都合、1区は第1～7トレンチ、2区は第8～11トレンチ、3区は第12・13トレンチ、4区は14～18トレンチとした（別添図参照）。

3. 調査の成果

(1) 各トレンチの概要

① 1区トレンチ

第1トレンチ (図3-1)

1区の最西端に長さ8.6m、幅3mで設定、掘削したトレンチである。

現耕作土・床土下は、最大160cmの厚みで暗灰色砂礫土（第3層）が堆積していた。また地山（明黄褐色砂質土）は、トレンチ内では2カ所で段を形成している状況がみられた。しかしこの段は、周辺の他のトレンチの状況からも、人為的なものであるという証左は得られなかった。いずれにしても地山は北から南に傾斜しており、トレンチの北端で現地表から1.6m（標高151.3m）、トレンチの南端で同じく2.6m（同150.2m）の深さで検出した。

先の第3層下には暗灰色砂礫土（第4層）の堆積がみられた。

遺物は第3層、第4層で検出した。須恵器・土師器片であり、古墳時代から平安時代に至る時期のものであった。

第2トレンチ (図3-2)

第2トレンチは第1トレンチと同じ水田内で、第1トレンチの北側に設定した。長さ7.6m、幅3mを掘削した。

トレンチの北端では現耕作床土直下（標高152.4m）で地山（明黄褐色砂質土）が検出されたが、地山は、北端より南に3mの地点で傾斜変換点をもって南方向に下がっていく。最も低い南端部での地山の標高は151.8mであった。

地山の低い部分には暗灰色砂礫土（第3層）が堆積していたが、これはその色調・土質から第1トレンチの第3層と同一層と思われる。

遺物は第3層から出上し、第1トレンチの第3層のものと同様であったが、第1トレンチ第3層ほどには量は多くなかった。

第3トレンチ (図3-3)

第3トレンチは、第1・2トレンチの東側、1段低い水田に設定した。長さ8.5m、幅3mを掘削した。

耕作土・耕作床土直下（標高151.2m）に地山（黄褐色砂質土）を検出した。遺構・遺物は検出されなかった。

第4トレンチ (図3-4)

第4トレンチは、第3トレンチと同じ水田内で、第3トレンチの北側に設定した。長さ4m、幅2.2mを掘削した。

第3トレンチと同様に耕作床土直下（標高151.1m）で黄褐色砂礫土を検出したので、同層の堆

積状態を確認するために深さ2.8mまで掘削したが、厚さ約2mは同様の土の堆積であった。深さ2.6mの地点(標高149.1m付近)で、暗褐色砂礫土の堆積がみられたが、これは地山の変化と理解される。

遺構・遺物は全く検出されなかった。

第5トレンチ(図4-1)

第5トレンチは1区最東端に設定したトレンチである。長さ15.8m、幅2mを掘削した。

現耕作床土直下(標高150.0m)に地山が検出され、遺構は全く認められなかった。遺物はわずかに床土から土師器・須恵器の細片が出土したに過ぎない。

第6トレンチ(図4-2)

第6トレンチは第3・5トレンチの南方に設定した。長さ2.2m、幅2mを掘削した。深さ約1.1mを掘ったが、北方向に地山が傾斜していく状況が認められた。検出した地山は高い所で標高150.4m、低い所で標高149.7mであった。

地山の低い部分にはその直上に暗褐色砂礫土の堆積がみられた。同層からはわずかながら、須恵器・土師器の細片が出土したが、時期を特定できる程の資料はなかった。

第7トレンチ(図4-3)

第7トレンチは、第6トレンチから畦道を挟んで南側に設定した。長さ・幅2mを掘削した。

土層断面図に示したように、床土直下は黄褐色砂礫および黒灰色砂礫が斜めに相互堆積する状況が看取された。これらの土層は拳大の礫を多量に含有しており、周囲のトレンチで検出した土層とも異なる点や、その堆積状況などから、これらは盛土、もしくは整地層と考えられる。当該トレンチの北側には、東西方向に伸びる畦道があるが、この道は南北の水田より一段低くなっている。つまり、この道は元々の谷筋に造られているものと考えられ、当該地点においては、このような谷を埋めて現在の水田が形成されているものであろう。

地山は、上記の整地層下にみられ、標高148.8mの高さで検出した。遺物は床土内から須恵器・土師器・中世期の陶器のそれぞれの細片が微量に出土した。整地層からもわずかながら須恵器・土師器細片が出土した。

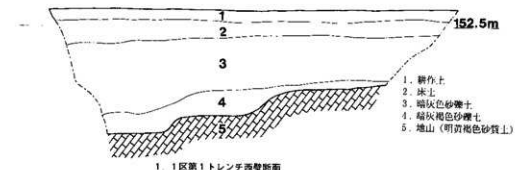
② 2区のトレンチ

第8トレンチ(図5-1)

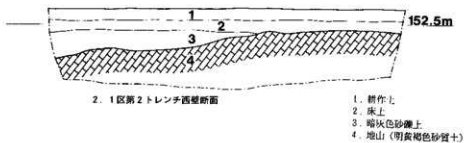
第8トレンチは、2区の南西部に設定したトレンチである。長さ8.2m、幅2mを掘削した。

北西端部を最も深く掘削し、現耕作土・床土下に暗褐色砂質土(第3層)、暗灰色砂質土(第4層)、暗黄褐色砂礫土(第5層)、暗灰色砂質土(第6層)、地山(明黄褐色砂礫)の順に土層の堆積を検出した。地山は北から南に傾斜している状況がみられた。地山の高い所の標高は168.8m、低い所は168.5mであった。

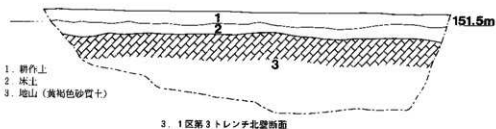
上記の各層毎に精査を繰り返したが、遺構は認められなかった。遺物は床土・第3層・第4層か



1. 1区第1トレンチ西壁断面



2. 1区第2トレンチ西壁断面



3. 1区第3トレンチ北壁断面



4. 1区第4トレンチ西壁断面



図3 トレンチ断面土層図1 (S. = 1/80)



1. 耕作土
2. 灰土
3. 地山 (黄褐色砂質土)

1. 1区第5トレンチ西壁断面

— 0 —



1. 耕作土
2. 灰土
3. 黄褐色砂質土
4. 地山 (黄褐色砂質土)

2. 1区第6トレンチ北西壁断面



1. 耕作土
2. 灰土
3. 黄褐色砂
4. 深褐色砂 (本人の層も多量に含有)
5. 地山 (黄褐色砂)

3. 1区第7トレンチ西壁断面



図4 トレンチ断面土層図2 (S. = 1/80)



図5 トレンチ断面土層図3 (S. = 1/80)

ら出土した。床土出土のものは細片であるため時期の特定が困難であるが第3・4層出土の須恵器・土師器は、古墳時代後半期に収まるようである。

第9トレンチ（図5-2）

第9トレンチは、第8トレンチの北東部の水田に設定した。長さ2.4m、幅2mを掘削した。

現耕作土・床土下に暗褐色砂質土（第3層）があり、地山（黄褐色砂質土）に至る。地山は、北から南に緩やかに傾斜していた。地山の高い所の標高は167.5m、低い所のそれは167.2mであった。

遺構は全く認められなかった。遺物は第3層から須恵器・土師器が出土した。いずれも破片であるが、時期の判るものにTK10型式^{〔7〕}の杯身があり、他も概ね古墳時代のもと思われる。

なお当該トレンチの第3層は、その色調・土質から第8トレンチの第3層に対応するものと思われる。

第10トレンチ（図5-3）

第10トレンチは、第9トレンチを設定した水田内で、第9トレンチの北側に設定した。長さ2m、幅2mを掘削した。

現耕作土・床土下に暗褐色砂質土がみられた。図5-3中、第3層と第4層は、色調などは同様であったものの、第3層が第4層に比してやや粘性をもっており、出土遺物についても量的に多かったため分層した。地山（黄褐色砂質土）は第4層下にあり、標高は168.1mであった。

遺構は全く認められなかったが、遺物は第3層・第4層から、土師器・須恵器が出土した。第3層では、土師器甕・高杯が、第4層から土師器鉢・小形丸底甕などが出土している。

第11トレンチ（図5-4）

第11トレンチは、第10トレンチの西側、一段高い水田内に設定した。長さ2m、幅2mを掘削した。

現耕作土・床土下に暗褐色砂質土（第3層）があり、その下層に地山（黄褐色砂質土）の堆積がみられた。地山の標高は167.4mであった。

遺構は全く認められなかったが、遺物は第3層から須恵器・土師器片が出土した。多くは細片化しており時期の特定は困難であったが、多くは古墳時代のもので占められるものの、1点平安時代後半期の土師器小皿が検出されている。

③ 3区のとレンチ

第12トレンチ（図6-1）

第12トレンチは3区の西端に設定した。長さ23.0m、幅1.3mを掘削した。

現耕作土・床上下に暗褐色砂質土・明黄灰色粘土などの堆積がみられ、その下層に地山（明黄灰色砂質土）が地積があった。図6-1の第3層と第5層は色調・土質などは同様であったが、第5層には人頭大もしくはそれよりやや小さい隙を多く含むが、第3層では隙の大きさが小さく含有量も少なかった。地山は北方向に緩やかに傾斜して下がっており、トレンチの北半部は微地形の谷

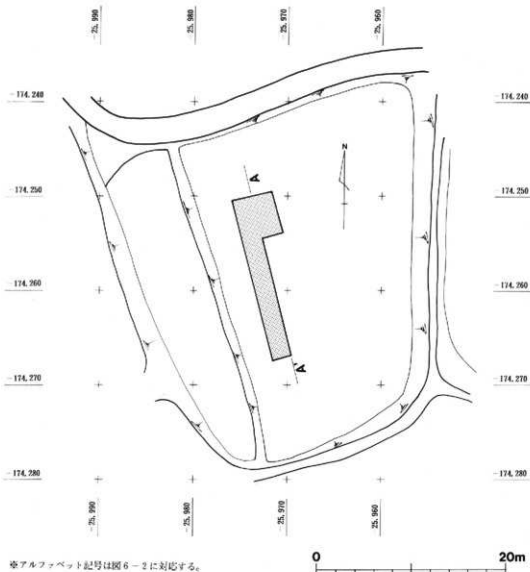
を形成するものと思われる。地山の高い所の標高は179.5m、低い所のそれは178.7mであった。

遺構は検出されなかったが、遺物は、須恵器・土師器・韓式系軟質土器の破片などが第3層から出土した。遺物の時期は概ね5世紀後半期に収まるようである。

第13トレンチ (図6-2)

3区の東端に設定したトレンチである。当初、長さ17.7m、幅2mで掘削していたが、北端で遺構状の落ち込みを認めたので、この部分を東に拡張した。トレンチの面積は46.9㎡になった。

トレンチ内の層序は、現耕作土・床土下に、東壁の断面で厚さ約20cmの遺物包含層(暗褐色砂礫土・第3層)が認められ、その下層に淡黄色砂礫土の地山を検出した。遺構はこの地山上面で検



★アルファベット記号は図6-2に対応する。

図6 第13トレンチ配置図 (S. = 1/400)

出できた。また遺物包含層は、西壁の断面では認められなかった。これは全体的な地形が西から東に傾斜しており、このような斜面地を耕地として利用するに際して、包含層も削半を受けたものと考えられる。なお、地山の標高は高いところで167.4m、低い部分で167.1mあった。

遺構の落ち村は、南西部でコーナーをなして南北・東西方向にそれぞれ直線的に伸びるものである。多くはトレンチ外に出るため全体的な規模などは不詳であるが、遺構の底から径約80cmの規模を有する支柱穴と思われるピットを検出したことから、方形プランを呈する竪穴住居であると考えられる。遺構の深さは、約20～30cmが遺存した。なお、検出したピットの規模は以下の通りである。ピット1は長径22cm、短径20cm、深さ22cm。ピット2は長径39cm、短径27cm、深さ10cm。ピット3は長径40cm、短径33cm、深さ30cm。ピット4は長径78cm、短径76cm、深さ30cm。ピット5は長径78cm以上、短径45cm、深さ18cm。ピット6は長径29cm、短径26cm、深さ20cm。また、住居内の埋土は、暗褐色砂礫土であった。

遺物は、第3層および竪穴住居埋土から出土した。

遺物包含層の遺物の密度は比較的高く、完形に近いものも出土した。土師器・須恵器が出土したが、須恵器の割合は非常に少なかった。土器の特徴からは、いずれも5世紀代に収まるようであり、また韓式系軟質土器破片も1点出土した。住居埋土からは、布留式後半期の直口壺、甕、高杯などのほか、陶質土器などが出土した。

④ 4区のトレンチ

第14トレンチ (図6-3)

4区の西端に設定したトレンチである。長さ14m、幅2mを掘削した。

トレンチの南半は床上直下に地山(黄褐色砂礫土)が見られたが、この地山は北半で傾斜して下がっていく状況が認められた。この傾斜変換点の北側には、現在の地形でも周囲の水田より一段低い畦道があり、微地形の谷を形成しているものと考えられる。また、地山の傾斜変換点から南側、第16トレンチまでは微地形の尾根が形成されていたものと考えられる。トレンチ南半部の地山の標高は179.9m、北端の最も低い部分のそれは179.0mであった。

北半の谷部分に堆積していた土は、暗黒灰色粘土混砂礫(第3層)であって、木片等を多く含んでいたが、土器は須恵器の細片が極微量出土したに過ぎなかった。

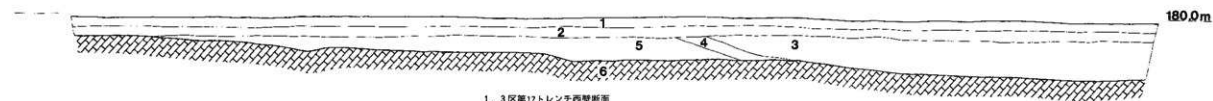
第15トレンチ (図6-4)

第15トレンチは第14トレンチの西側に設定した。長さ16m、幅2.1mを掘削した。

耕作床土直下で、地山の堆積がみられ、遺物包含層等は認められなかった。地山の標高は178.4mであった。遺物は、僅かに現耕作土上面で、須恵器・土師器の細片を採集したのみであった。

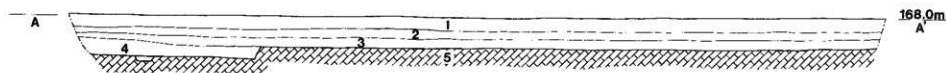
第16トレンチ (図9-1)

4区の最南端に設定した。長さ4m、幅2.5mを掘削した。第16トレンチの南側は、現地形でも谷を形成して川(竹田川)が流れているが、トレンチ調査の結果からも地山(黄褐色砂礫土)が北



1. 3区第12トレンチ西壁断面

1. 耕作土
2. 灰土
3. 暗褐色砂礫土
4. 明褐色粘土
5. 暗褐色砂礫土
6. 地山 (明褐色砂礫土)



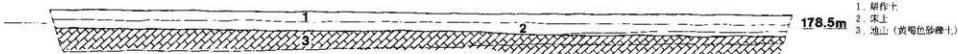
2. 3区第13トレンチ東壁断面 (アルファベット記号は図7に対応する)

1. 耕作土
2. 灰土
3. 暗褐色砂礫土
4. 暗褐色砂礫土 (注: 河沖土)
5. 地山 (淡黄色砂礫土)



3. 4区第14トレンチ西壁断面

1. 耕作土
2. 灰土
3. 暗褐色粘土上面砂礫
(木片等有機質を多く含む)
4. 地山 (黄褐色砂礫土)



4. 4区第16トレンチ西壁断面

1. 耕作土
2. 灰土
3. 地山 (黄褐色砂礫土)

図7 トレンチ断面土層図4 (S₁ = 1/80)

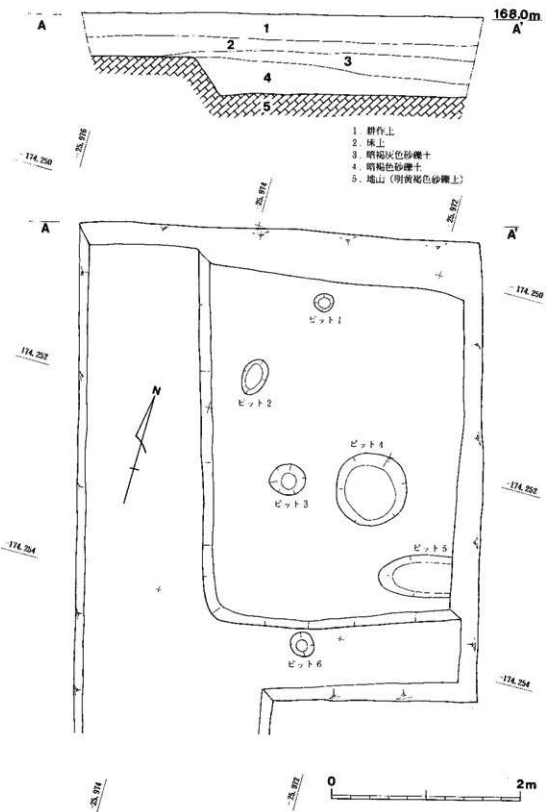


図8 壑穴住居 平・断面図 (S. - 1 / 40)

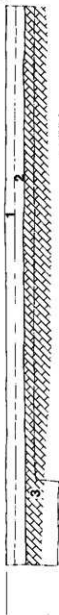
1. 耕作土
2. 床土
3. 黄褐色砂礫土
4. 暗褐色砂礫土
5. 地山 (黄褐色砂礫土)

180.0m



1. 4区第16トレンチ西壁断面

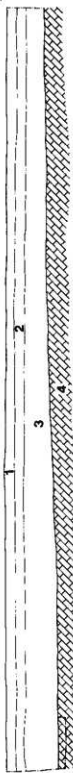
166.5m



1. 耕作土
2. 床土
3. 地山 (黄褐色砂礫土)

2. 4区第17トレンチ南西壁断面

166.5m



1. 耕作土
2. 床土
3. 黄褐色砂礫土
4. 地山 (黄褐色砂礫土)

3. 4区第18トレンチ西壁断面



図9 トレンチ断面十図5 (1/80)

から南に傾斜している状況が看取できた。トレンチの北端での地山の標高は179.6m、南端でのそれは178.8mであった。

遺構は全く認められなかったが、第3層、第4層から須恵器・土師器の細片が出土した。いずれも出土量はわずかであるが、第4層の方がより少なかった。

第17トレンチ (図9-2)

第15トレンチの西側に設定した。長さ12m、幅1.7mを掘削した。現耕作床土直下で地山が検出され、遺構・遺物は認められなかった。地山の標高は166.1mであった。

第18トレンチ (図9-3)

4区の最東端に設定したトレンチである。長さ16m、幅2mを掘削した。現地表から約1mで地山に達したが、耕作土・耕作床土下には、明褐色砂礫土(第3層)の安定した土の堆積があり、遺物は全く検出されなかった。また遺構についても認められなかった。地山の標高は165.7mであった。

(2) 遺物 (図10~15)

出土遺物は、コンテナバット(54cm×34cm×18cm)に10箱程を得たが、そのうち57点を図10~15に示した。図化に際しては実測可能なものは極力図示するように努めたが、破片があまりに小さく、かつ、同一層位で同様の形態を示すものがある場合には省略したものもある。

図10~15は、各遺物をトレンチごとに配列し、同一ページでトレンチが異なるものは実線で区画している。また図中薄いトーンは黒斑を、濃いトーンは煤の付着を示している。

以下、出土遺物について述べるが、詳細は観察表(27頁~41頁)を参照されたい。

図10-1~7は、1区第1トレンチ第3層出土遺物である。1・2は須恵器、3~7は土師器である。

1は、口径10.1cmと小形の杯身である。底部はヘラキリ未調整である。TK217型式に比定できる。2は、短く外側に開く高台をもつ須恵器杯身である。飛鳥V期⁽⁸⁾に位置付けられよう。3は、土師器甕である。口縁部の破片である。時期の特定は困難であるが、7世紀後半から8世紀にかけてのものであろう。4・5は土師器杯である。4は、体部外面をヘラケズリし、底部と口縁部の境界は段をなして屈曲する。飛鳥V期に位置付けられる藤原宮西方官衙SE1105出土資料⁽⁹⁾などに類例がある。5は、短く外側に開く高台がつく。8世紀前半期のものであろう。6は、土師器高杯である。脚部のみが残存した。柱状部の形態は、下半にわずかに膨らみをもつ。布疋式後半期に相当するものであろう。7は、土師器小皿である。いわゆる「て」字状口縁を呈するものである。11世紀中葉から後半期のものである。

図10-8~12は2区第8トレンチ第3層出土遺物である。

8~11は須恵器杯甕である。8は、天井部と口縁部の境界の稜線はごく短く突出し、稜線下端部

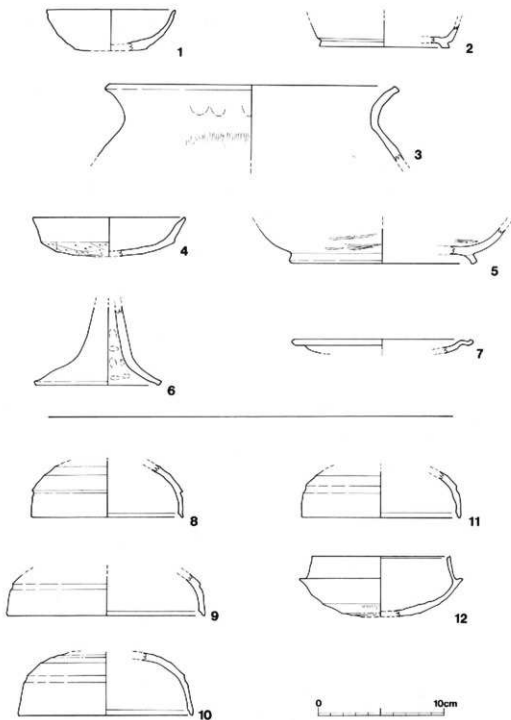


图10 出上遺物1 (上段: 第1 Tr. 3 層, 下段: 第8 tr. 3 層 S. = 1/3)

は凹線状にくぼむ。9は、I径15.4cmと大形のものである。天井部とI縁部の境界は鈍い稜線となり下端は凹線となる。I縁端部は面をなす。10・11は同様の形態である。天井部とI縁部の境界は凹線となり、I縁端部は不明瞭な面をなす。以上の土器は、8はTK47型式に、9はMT15型式に、10・11はTK10型式にそれぞれ相当するものである。

12は、須恵器杯身である。底部は膨らみ丸みをもつ。立ち上がり部はやや内傾し、端部はわずかに内傾する面をなす。TK47型式に相当する。

図11-13・14は2区第9トレンチ第3層出土遺物である。

13は、土師器高杯である。脚部のみが残存した。柱状部は緩やかに外反して裾部につながり広がる。柱状部と裾部の境界付近に円形のスカシを有する。14は、甗把手部である。いずれも時期の特定は困難な資料であるが、古墳時代の土器であろう。

図11-15～19は2区第10トレンチ出土遺物である。15・16・19は第3層で、17・18は第4層で検出した。

15は、土師器高杯杯部である。底部とI縁部の境界は不明瞭な段をなす。16・19は土師器甕である。16は、I縁部は体部から外上方に伸びるが、中位でわずかに屈曲してやや直立ぎみになる。19は、体部最大径をその上半にもつ。I縁部は外上方に伸び、端部は内側に肥厚する。17は、土師器小形丸底壺である。扁平な体部に近く開くI縁部がつく。黒夷を有する。18は、土師器甕である。やや扁平な体部に比較的短いI縁部がつく。体部とI縁部の境界は明瞭に屈曲する。I縁部は直線的に外上方に開き端部は薄く尖る。

これらの土器は、16などは時期の特定が困難であるが、15・19は明日香村・上ノ井手遺跡井戸SE030上層出土資料に類例を求めることができる。17は形態としては同下層出土資料に類似するが、外面をやや粗雑なナデ調整で仕上げており、より新しい要素をもつ。18の意は必ずしも類例の多いものではないが、寺沢薫氏はこのような形態の土器を「陶質土器をコピーしたもの」と考えられ、布留3式に出現するものと述べられている¹¹⁾。当該資料についても布留式後半のうちに位置付けられるものであろう。

図11-20は土師器小皿である。2区第11トレンチ第3層で検出した。I縁部のみ破片であり、時期の特定も困難であるが、形態的には奈良Ⅱ期前半に位置付けられる平城京左京六条三坊十二坪井戸SE14や平城京左京二条七坊九坪上墳SK01出土資料に類例があり、当該資料についても当該期と考えておきたい。

図12-21～29・図13-30～34は3区第12トレンチ第3層出土遺物である。

21は、須恵器杯身である。底部下面にはほぼ垂直に短い高台がつく。22は、須恵器高杯脚部である。裾部は柱状部から緩やかに屈曲して開く。裾部上半部に突帯を1条巡らせる。23は、土師器二重I縁壺である。I縁部は体部から大きく屈曲して外上方に伸びた後、段をなしてわずかに外傾して上方に伸びる。24～26は、土師器高杯である。杯部の形態が判る24は底部からI縁部にかけての屈曲

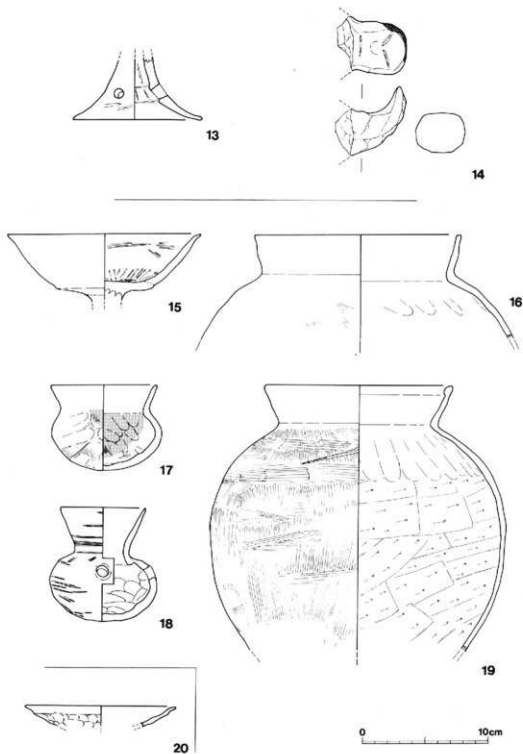


图11 出土遺物2 (上段; 第9Tr. 3層, 中段; 15・16・19は第10Tr. 3層
17・18は第10Tr. 4層 左下; 第11Tr. 3層 S. = 1/3)

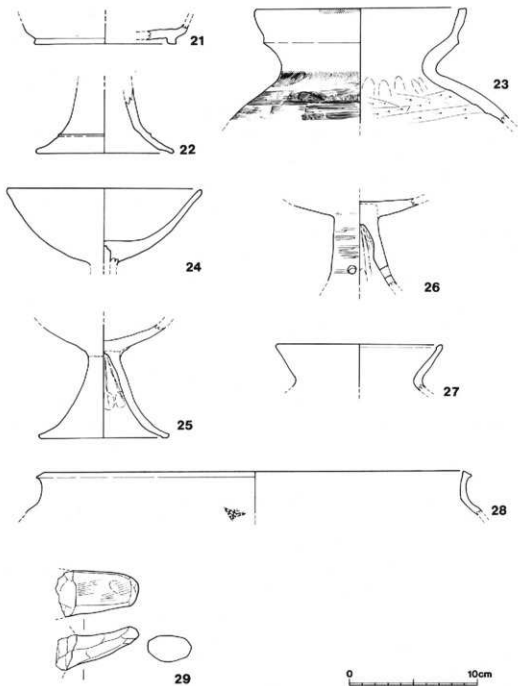


图12 出土遺物3 (第12Tr. 3層 S. = 1/3)

が緩やかで稜を形成しない。口縁端部は丸くおさめる。25・26は脚部の破片である。25は脚柱状部から裾部にかけて緩やかに開きながら下る。28・30～34は、韓式系軟質土器甕の破片である。口縁部の形態が判るものは28のみであった。わずかな残存部分から口径を復元したが、34.0cmを測った。口縁端部は外側に肥厚して外傾する面をなす。残存部下端に格子目タキを残している。30～34は、いずれも小破片であるが、体部外面に格子目タキが認められた。29は、甕把手部である。先端部はやや上方に屈曲する。

以上の資料は、21の須恵器杯身が飛鳥V期に相当するものである。22の須恵器高杯は脚部のみが残存したものであるが、中村浩氏の編年⁹³⁾では22のように裾部上半に突帯が巡る例はI型式1・2段階にみられる。また、円形のスカシを配している点で22とは異なっているが、裾端部が下方に突出しない例は、TK73号窯出上資料中⁹⁴⁾に示されている。

土師器については、25・26・29などはその編年上の位置付けは困難であるが、23は寺沢氏編年の布留3式に相当するものである。また24・27は上ノ井手遺跡井戸SE030上層出土資料に類似する。

韓式系軟質土器28・30～34は、いずれも小破片であるためあって、それ自体では時期の特定が困難な資料である。ただ、当該遺物包含層出土の資料が、21が7世紀末から8世紀初頭のものであるほかは、5世紀中葉から後葉の時期に収まるものである。図化し得なかった資料を含めても、21を除いては6世紀以降の資料が認められないので、この1点については包含層であるが故の混入とみなし、28・30～34は5世紀後半期のものと考えておきたい。

図13-35～40・図14-41～47・図15-48は、3区第13トレンチ第3層出土資料である。

35は、須恵器高杯である。杯部口縁部は直線的に外上方に開き、端部は強いヨコナデにより外側に肥厚する面をもつ。口縁部に波状文を施文する。脚部は柱状部から緩やかに屈曲して広がる。

36～44は土師器高杯である。杯部の形態が判るのは36～40であるが、36は、杯口縁部と底部の境界は明瞭に屈曲して段をなす。口縁部はやや外反しながら外上方に伸び、端部は面をなす。37～40は碗形の杯部をもつものであるが、37は、他に比して杯部が浅く、また底部内面が上方に盛り上がるなどの形態も異なる。38・40は、杯口縁端部が面をなすが、39は、丸くおさめる。41～44は高杯脚部のみが残存したものである。41・44は柱状部下半に膨らみをもち、柱状部と裾部の境界は明瞭に屈曲する。脚部下半を全く欠く42についても同様の形態のものであろう。43は、柱状部と裾部の境界があまり明瞭でなく、柱状部の長さも短いもので、他と形態が異なる。また、41～43は、内面にシボリメを残しているが、44は、ヨコ方向のヘラケズリによってそれが消されている。

45は土師器甕である。偏平な体部にやや短い口縁部がつく。外面はナデ調整によっている。46は、土師器甕である。口縁部は球形を呈する体部から屈曲して外上方に開き、端部は内側に肥厚してわずかに内傾する面をもつ。

47は、土師器甕である。口縁部は外反して開き、端部は面をなす。48は韓式系軟質土器甕である。外面に格子目タキの痕跡を残す。

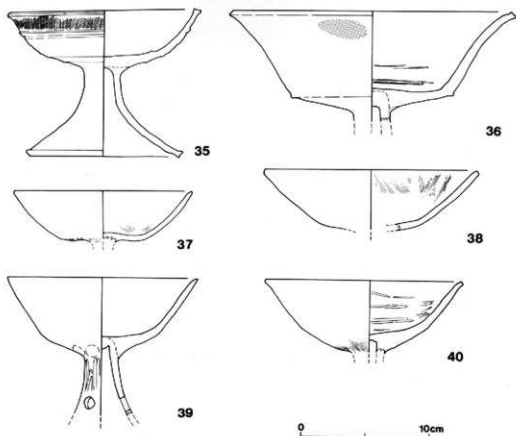
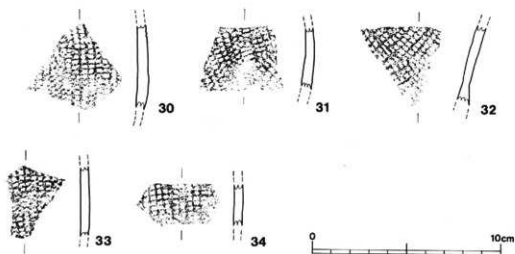
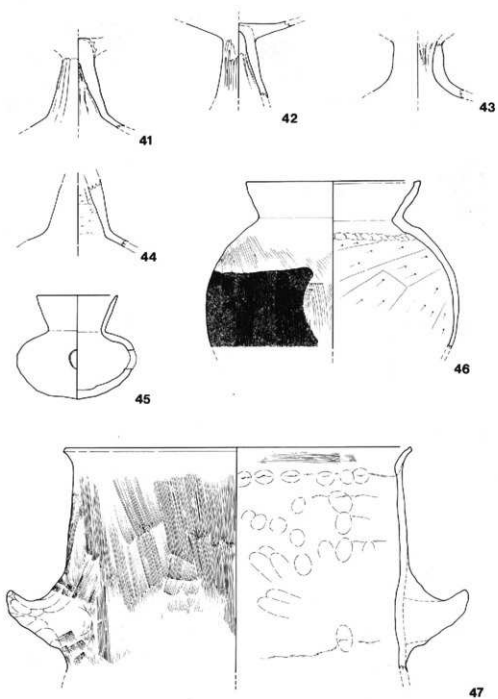
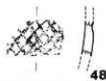


图13 出土遺物4 (上段; 第12Tr. 3層 S. = 1/2, 下段; 第13Tr. 3層 S. = 1/3)

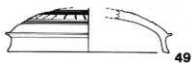


0 10cm

图14 出土遺物5 (第13Tr. 3層 S. = 1/3)



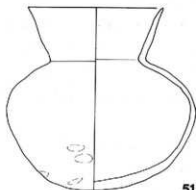
48



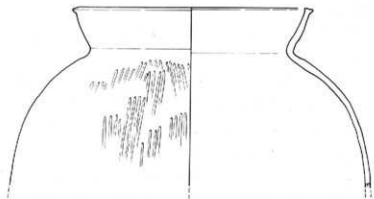
49



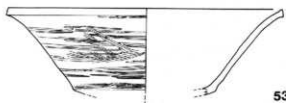
50



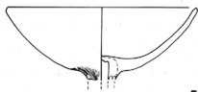
51



52



53



54



55



56



57



图15 出土遺物6 (上段; 第13Tr. 3層 S.=1/2, 中段; 第13Tr. 住居埋土, 下段; 第16Tr. 3層 S.=1/3)

以上の第13トレンチ第3層出土土器は、35の須恵器高杯は類例の少ない形態であるが、5世紀代に位置付け得るものである。土師器高杯は、43などは時期の特定は困難であるが、36は寺沢編年では布留3式に出現する人形高杯に相当する。当該資料も布留式後半のうちに位置付けられよう。その他のものでは、37はやや新しい要素をもつが、概ね上ノ井手遺跡井戸SE030ト層出土資料に類似するようである。また45の上師器壺は、2区第10トレンチ第3層出土の18に類似するが、体部がより偏平になっており、口縁部も短く、外面の調整についてもより粗雑であるなど、より新しい要素をもつ。

いずれにしてもこれらの土器は、若干の時期差はあるもの5世紀中葉から後葉のうちに収まるものと考えられる。

図15-49~52は第13トレンチ住居埋土中から出土したものである。

49は、陶質土器蓋形土器である。高杯蓋と思われる。つまみ部分を欠損している。天井部外面のカキメ文様帯間に挿列点文を施す。天井部と口縁部の境界となる稜線は薄く突出しやや外上方に向く。

50は、土師器高杯である。やや浅い口の椀状の杯部である。口縁端部は丸くおさめる。51は、土師器直口壺である。体部はやや偏平な球形を呈する。口縁部は体部から明瞭に屈曲して外上方に伸びる。端部は薄く尖る。52は、土師器壺である。口縁端部は外側に肥厚してわずかに外傾した面をなす。体部外面はタタキ後ナデ調整するが、タタキ痕跡を残す。

以上の住居埋土中で検出した土器には、50~52は布留式後半期に位置付けられる。49については、濱口芳郎氏¹³⁾によれば、機内地城出土の蓋形陶質土器では「6世紀前半より下がる遺構より出土」した資料は異例であって、当該資料も5世紀中葉を前後する時期のものと考えたい。

図15-53~57は、4区第16トレンチ第3層出土のものである。

53~56は土師器高杯である。杯部の形態が判るものは53・54・56である。53は、底部と口縁部の境界が段をなして屈曲し、口縁部は外方に伸びる。口縁端部は外傾する面をなす。形態は第13トレンチ第3層出土の36に類似するが、底部の口縁部の境界が53の方がより不明瞭である。54・56は、碗形の杯部を呈する。口縁端部は54は不明瞭な面をなすが、56は丸くおさめる。

57は土師器瓶底部である。底径は残存1/6から復元したものであるが、底部縁辺部に円形の穿孔があり、底径から考えて、5箇所に穿孔したものとと思われる。

これらの第16トレンチ第3層出土遺物は、5世紀後半期に位置付けられるものである。

4. ま と め

以上のように、今次調査では18箇所のトレンチを設定、掘削したが、遺構の密度は極めて低く、第13トレンチで検出したに過ぎない。しかし、調査の結果、調査区周辺の旧地形を、部分的ではある程度知ることができた。特に3・4区では、別添図に赤破線で示したように、第12・14・16トレンチで地山の傾斜変換点がみられた。3・4区は、この2つの調査区を分ける現在の畦道の部分が谷地形になっており、それを挟んで南北に、東西方向に伸びる尾根が形成されていたようである。金剛山麓部に当たる当該地域は、徹視的にもこのような尾根が手の指状に形成されていたものと思われる。1区についても、第6トレンチと第7トレンチの間の畦道が周辺の水田面に比して1段下がっており、同様の谷地形が形成されている。

さて、今回の調査で、遺物包含層が認められたのは、1区第1・2・6トレンチ、2区第8・9・10・11トレンチ、3区第12・13トレンチ、4区第16トレンチであった。

1区で遺物を図示できたのは第1トレンチのみであったが、当該トレンチ第3層は古墳時代中期から平安時代に至る雑多な資料を含むものであった。2区ではすべてのトレンチで遺物包含層をみた。4箇所のトレンチは近接しており、包含層の土質・色調などからは同一層である可能性が高いが、第8トレンチの遺物は6世紀中葉までの資料が含まれるのに対して、第10トレンチのそれは概ね5世紀後半に収まるようである。第11トレンチでは、多くは細片であったが、古墳時代の須恵器・土師器が検出されており、1点のみ11世紀後半から12世紀前葉の資料が含まれていた。このように、2区の包含層は若干の時期差はあるものの、1区に比べると遺物相は古墳時代後半期に限られてくる状況であった。

しかしながら、1区はもちろん2区においても遺構は検出されておらず、このことは1区と2区の間地点に位置する第7次調査地においても同様であった。第7次調査地で検出された遺物は、近年その存在が確認された南郷遺跡からの流失土中に含まれていたものと理解されたが、今次調査地の1区・2区の遺物も同様のものと考えられよう。

3区では、第12・13トレンチで遺物包含層が確認できた。遺物は、若干の混入が認められるものの、5世紀中葉から後葉に限られるものと理解でき、1・2区の状況とは異なる。また、第13トレンチでは佐田遺跡では現在までのところ唯一の遺構が検出された。第12・13トレンチは現地地形からも一連の徹尾根上にあるものと理解され、遺物包含層の上のような状況からも、この尾根上には遺構の広がりが見込まれる。これは南郷遺跡に連なるものかも知れず、あるいは当該地の東方に位置する下茶屋遺跡（平成5年3月現在、御所市教育委員会調査中）の一面を占めるものかもしれない。

3区の調査で注目すべきもう1点は、遺物包含層で韓式系軟質土器が、壑穴住居埋土中から陶質土器が検出されたことである。この種の土器の出上は各地で増加しつつあるが、南葛城地域においてはなお不明な点が多い。今後、韓式系土器の問題が当遺跡の調査・研究にとって一つの課題とな

るだろう。

4区では、第16トレンチで遺物包含層が検出された。図示したものは5世紀代に位置付けられるものであったが、細片化したものに奈良時代以降のものも含まれていた。また4区では遺構は全く検出されておらず、この点では1・2区と同様の状況であった。おそらく、当該包含層出土遺物についても南郷遺跡からの流出土中に含まれていたものと思われる。

このように、今次調査によって佐田遺跡の広がりについては一定の見通しをつけ得た。北半部では比較的密度の高い遺物包含層が存在することが明らかになり、南半部には遺構が存在することも確認できた。遺跡範囲については、北端は従来どおり百百川まで、南端については4区再南端の第16トレンチで遺物包含層が確認できたので、竹田川の北側の尾根までと考えられる。

以上のような調査結果から、1・2区で検出された遺物包含層については、今後の開発行為に際してはその取り扱いには十分な配慮が必要になるといえる。また、3区が位置する微尾根上では遺構の広がりが想定できたが、それらが南郷遺跡または卜茶屋遺跡とどのように関連するものであるかという点は今後の大きな課題だろう。さらに前記した韓式系土器の問題も含め、なお究明すべき点が数多いといえる。

文 献 註

- (1) 木許 守「[16-D-2]遺跡試掘調査」〔中西遺跡-第3次発掘調査報告-平成2年度国庫補助金緊急調査の成果〕〔御所市文化財調査報告書 第10集〕、1991年)
- (2) 木許 守(前掲書(1))
- (3) 木許 守「佐田遺跡 第3次・第5次調査」〔平成3年度 個人住宅等建築に伴う市内遺跡発掘調査〕〔御所市文化財調査報告書 第13集〕、1992年)
- (4) 木許 守(前掲書(3))
- (5) 本書第Ⅱ章第1節
- (6) 足子奈美枝・藤田和尊「佐田遺跡7次発掘調査報告」〔御所市文化財調査報告書 第15集〕、1993年)
- (7) 田辺昭二「陶器古窯址群 I」〔平安学園考古学クラブ研究報告〕第4号、1966年)以下、本書では古墳時代須恵器の編年については特に断らない限り同書による。
- (8) 西 弘海「B 土器の時期区分と型式変化」〔飛鳥・藤原宮発掘調査報告 II〕〔奈良国立文化財研究所学報〕第31冊、1978年)
- (9) 西 弘海(前掲書(8))
- (10) 安達厚一・木下正史「飛鳥地域出土の古式土師器」〔考古学雑誌〕第六十巻第二号、1974年)
- (11) 寺沢 薫「畿内古式土師器の編年と二、三の問題」〔矢部遺跡-奈良県史跡名勝天然記念物調査報告〕第49冊、1986年)
- (12) 森下恵介・立石堅志「大和北部における中近世土器の様相-奈良市内出土資料を中心として-」〔奈良市埋蔵文化財調査センター紀要〕、1986年)
- (13) 中村 浩「和泉陶器出土遺物の時期編年」〔陶器 III〕〔大阪府文化財調査報告書第30輯〕、1980年)
- (14) 中村 浩「遺物」(前掲書(13))
- (15) 濱口方郎「原田遺跡の韓式系土器・陶質土器について」〔原田遺跡 第3次調査報告〕〔大和郡山市埋蔵文化財発掘調査報告書 第2集〕、1992年)
- (16) 藤田和尊「まとめ」(前掲書(6))

表1 佐田遺跡第4次調査 出土遺物観察表

番号 器種 出土層位	形態とその他の特徴、調整 ・口頸部 器高()内数値は残存高 ・体部 ・底部(脚台部)	胎 土	焼成	色調・外面 ・内面 ・断面
1 (図10) 須恵器 杯身 1区1Tr.3層	口径 10.1cm (残存1/6から回転復元) 器高 3.2cm 底部から口縁部にかけて緩やかに内彎しながら立ち上がる。口縁端部は強いヨコナデによって、丸くおさめる。 ・外面 ヨコナデ (ロクロ回転方向は右回り) 内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヘラ切り未調整 内面 ヨコナデ	直径1mm以下の石英・長石・金雲母を含む。	良好	・淡青灰色 ・暗青灰色 ・暗青灰色
2 (図10) 須恵器 杯身 1区1Tr.3層	口径 10.0cm (残存1/6から回転復元) 器高 (2.0cm) 高台部は底部のやや内側から短く外側へ開く。高台端部は鋭く屈曲して面をなす。 ・ ・外面 ヨコナデ (ロクロ回転方向は右回り) 内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	直径1mm以下の長石・石英・金雲母を含む	良好	・淡青灰色 ・淡青灰色 ・淡青灰色
3 (図10) 土師器 甕 1区1Tr.3層	口径 22.4cm (残存1/8からの回転復元) 器高 (6.0cm) 口縁部は外傾して開き、端部は上方にわずかにつまみ出す。 ・外面 指頭による押圧後ヨコ方向ナデ 内面 ヨコ方向ナデ ・外面 タテ方向ハケ 内面 ナデ ・	直径1mm以下の石英・長石・金雲母を含む	良好	・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色
4 (図10) 土師器 杯身 1区1Tr.3層	口径 11.8cm 器高 3.1cm 口縁部と底部の境界は、緩やかな段をなす。口縁部はわずかに外傾して開き、端部は丸くおさめる。 ・外面 ヨコ方向ナデ 内面 ヨコ方向ナデ ・ ・外面 不定方向ヘラケズリ 内面 ナデ	直径1mm以下の石英・長石・赤色粒を含む	良好	・淡赤褐色 ・淡赤褐色 ・淡赤褐色

番号 器種 出土層位	形態とその他の特徴、調整 器高()内数値は残存高 ・口頸部 ・体部 ・底部 (脚台部)	胎 土	焼成 色澤・外面 ・内面 ・断面
5 (図10) 土師器 杯身 1区1tr.3層	高台径 14.2cm (残存1/6から回転復元) 器高 (2.9cm) 高台部は短く外側に開く。端部は鋭く屈曲して、面をもつ。 ・ - ・外面 ナデの後、ヨコ方向のヘラミガキ ・内面 ナデの後、ヨコ方向のヘラミガキ ・外面 ヨコ方向のナデ ・内面 ヨコ方向のナデ	直径1.5mm以下の赤色粒を多く含む。 0.5mm以下の長石を含む。 石英・金雲母をわずかに含む。	良好 ・赤褐色 ・淡赤褐色 ・淡赤褐色
6 (図10) 土師器 高杯 1区1tr.3層	裾部径 10.0cm (残存1/4から回転復元) 器高 (6.3cm) 脚柱状部は、下半にわずかに膨らみをもつ。柱状部から裾部にかけては、緩やかに屈曲して、裾部は大きく開く。裾端部は強いヨコ方向のナデによって、面をなす。 ・ - ・ - ・外面 ナデ ・内面 指頭による押し後ナデ	直径1mm以下の石英・長石・金雲母を含む。	良好 ・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色
7 (図10) 土師器 小皿 1区1tr.3層	口径 13.8cm 器高 (1.1cm) 口縁部は屈曲して底部との境をなし、端部は強いヨコ方向のナデによって上方に突出する。いわゆる「て」字状口縁を呈する。 ・外面 ヨコ方向ナデ ・内面 ヨコ方向ナデ ・ - ・ -	直径1mm以下の長石・金雲母をかなり含む。 石英を含む。	良好 ・淡灰褐色 ・淡灰褐色 ・淡灰褐色
8 (図10) 須恵器 杯蓋 2区8Tr.3層	口径 12.0cm (残存1/8から回転復元) 器高 (1.2cm) 天井部は膨らみ、丸みをもつ。天井部と口縁部の境界の稜線は、ごく短く突出し、下端部は凹線状にくぼむ。口縁部は下方に直線的に伸び、端部は鈍い稜をなして面をもつ。 ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 天井部は2/3をヘラケズリ(ロクロ回転方向は右回り) ・内面 ヨコナデ ・ -	長径4mm程度の長石散れを含む。 直径1mm以下の石英・金雲母を含む。	良好 ・淡灰色 ・淡灰色 ・淡灰色

番号 器種 出土層位	形態その他の特徴、調整 器高()内数値は残存高 ・口頸部 ・体部 ・底部(脚台部)	胎 土	焼成	色調・外面 ・内面 ・断面
9 (図10) 須恵器 杯蓋 2区8 Tr. 3層	口径 15.4cm (残存1/10から回転復元) 器高 (3.1cm) 天井部と口縁部の境界は、鈍い稜線となりごくわずかに突出する。下端は凹線となる。口縁部は、内側に傾斜する面をなす。端面中央はごく浅くくぼむ。 ・外面 ヨコナデ(ロクロ回転方向は右回り) 内面 ヨコナデ ・外面 天井部のヘラケズリは2/3以下である。 内面 ヨコナデ ・-	長径7mm大の石英を若干含む。直径1.5mm以下の長石を含む。1mm以下の石英・チャートを若干含む。	良好	・暗灰色 ・暗灰色 ・暗灰色
10 (図10) 須恵器 杯蓋 2区8 Tr. 3層	口径 13.6cm (残存1/5から回転復元) 器高 (4.9cm) 天井部はやや膨らみ丸をもつ。口縁部は直線的に外下方に開く。天井部と口縁部の境界は凹線となる。口縁部は不明瞭な面をなす。 ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 天井部全体をヘラケズリ(ロクロ回転方向は右回り) 内面 天井部はヨコナデ ・-	直径7mm程度のチャートを含む。2mm以下の石英・長石・金雲母を含む。	良好	・淡灰色 ・淡灰色 ・淡灰色
11 (図10) 須恵器 杯蓋 2区8 Tr. 3層	口径 12.4cm (残存1/8から回転復元) 器高 (3.9cm) 天井部は膨らみ丸をもつ。天井部と口縁部の境界は凹線となる。口縁部は下方に下り、口縁部は不明瞭な稜で面をなす。 ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 天井部の2/3をヘラケズリ(ロクロ回転方向は右回り) 内面 ヨコナデ ・-	直径2mm以下の石英を含む。直径1mm以下の長石・金雲母を含む。	良好	・淡灰色 ・淡灰色 ・淡灰色
12 (図10) 須恵器 杯身 2区8 Tr. 3層	口径 11.0cm (残存1/3から回転復元) 器高 4.8cm 底部は膨らんで丸をもつ。立ち上がり部はやや内傾する。立ち上がり部はわずかに内傾する面をなす。受部先	直径2mm以下の長石・石英・金雲母を含む。	やや不良	・淡灰色 ・暗赤褐色 ・暗赤褐色

番号 器種 出土層位	形態とその他の特徴、調整 器高()内数値は残存高 ・口頸部 ・体部 ・底部(脚台部)	胎 土	焼成	色調・外面 ・内面 ・断面
	<p>端は丸くおさめる。</p> <p>・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ</p> <p>・ -</p> <p>・外面 底部の2/3をヘラケズリ(ロクロ回転方向は右回り) 内面 ヨコナデ</p>			
13 (図11) 土師器 高杯 2区9 Tr. 3層	<p>器口径 10.2cm (残存2/3から回転復元) 器高 (5.0cm)</p> <p>脚柱状部から裾部にかけては緩やかに外反して開く。裾部は丸くおさめるが、端部下端の一部に調整時に生じた粘土の重なりが残る。柱状部と裾部の境界付近に径1.1cmの円形のスカンを一方に配す。</p> <p>・ -</p> <p>・ -</p> <p>・外面 ナデ調整の後ヘラミガキ。ただしミガキは器表摩滅のため残存状況は悪い。 内面 柱状部は未調整であり、シボリメおよび粘土接合痕を残す。裾部はナデ調整。</p>	1mm以下の長石・石英・金雲母を含む。チャートを若干含む。	やや不良	・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色
14 (図11) 土師器 瓶 2区9 Tr. 3層	<p>瓶の把手部である。先端部は屈曲して上方を向く。上面に「V」・「一」字に記号状の痕跡がある。全体に指頭による押圧により調整する。下面の一部に煤の付着が認められる。</p>	2mm以下の石英を多量に含む。長石・金雲母を含む。	良好	・淡黄褐色 ・ - ・赤褐色
15 (図11) 土師器 高杯 2区10 Tr. 3層	<p>口径 15.0cm (残存1/5から回転復元) 器高 (5.1cm)</p> <p>杯底部と口縁部の境界は不明瞭な段をなす。口縁部は大きく開きながら外上方に伸び、端部は屈曲して外側に開く。</p> <p>・外面 杯口縁部はヨコ方向ナデ 杯底部は指頭による押圧後ナデ 内面 杯口縁部はヨコ方向ナデ 杯底部は放射状の暗文風のヘラミガキ</p> <p>・ -</p> <p>・ -</p>	直径2mm以下の石英・長石・金雲母を含む。赤色粒を若干含む。	良好	・赤褐色 ・赤褐色 ・黄褐色
16 (図11) 土師器 甕 2区10 Tr. 3層	<p>口径 16.8cm (残存1/5から回転復元) 器高 (8.2cm)</p> <p>口縁部は体部から外上方に伸びるが、中位でわずかに屈</p>	直径2mm以下の石英を多量に含む。	やや不良	・白灰色 ・白灰色 ・黒灰色

番号 原種 出土部位	形態その他の特徴、調整 器高()内数値は残存高 ・口頸部 ・体部 ・底部 (脚台部)	胎 上	焼成	色調・外面 ・内面 ・断面
	曲してやや両立ちきみになる。端部はわずかに外側に肥厚してわずかに内傾する面をなす。 ・外面 ヨコ方向ナデ 内面 ヨコ方向ナデ ・外面 タテ方向ハケ 内面 ナデ (外面のハケメは器表摩滅のため、残存状況は良くない)	1mm以下の 長石を含む。 2mm以下の チャート・ 金雲母を若干含む。		
17 (図11) 上師器 小形丸底巻 2区10Tr. 4層	口径 8.2cm (残存1/4から回転復元) 頸部径 6.9cm 体部最大径 8.7cm 器高 6.8cm やや扁平な体部に、短い口縁部がつく。体部と口縁部の境界は緩やかに屈曲する。口縁部は外傾して開き、端部は丸くおさめる。 体部に黒斑を有す。 ・外面 ヨコ方向ナデ 内面 ヨコ方向ナデ ・外面 不定方向ナデ 内面 指頭による押し後ナデ ・外面 ハケ(8条/cm)後ナデ 内面 指頭による押し	直径1mm以下の石英・長石。金雲母を多量に含む。1mm以下の赤色粒をわずかに含む。	やや不良	・淡褐色 ・暗褐色 ・黒灰色
18 (図11) 上師器 匙 2区10Tr. 4層	口径 6.6cm (残存1/2から回転復元) 頸部径 4.2cm 体部最大径 8.4cm やや扁平な体部に比較的短い口縁部がつく。体部と口縁部の境界は明瞭に屈曲する。口縁部は直線的に外上方に開き、端部は尖る。体部中央よりやや上に円形の穿孔(径0.9cm)を行う。口縁部の1/2を欠損するが、体部は完存する。 ・外面 ナデ後ヨコ方向のヘラミガキ 内面 ヨコ方向ナデ ・外面 ナデ後ヨコ方向のヘラミガキ 内面 ナデ ・外面 ナデ後ヨコ方向のヘラミガキ 内面 ナデ (器表の摩滅のため、外面ヘラミガキはいずれも残存状況はよくない)	直径1mm以下の長石・石英・赤色粒を若干含む。	良好	・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色

番号 器種 出土層位	形態とその他の特徴、調整 器高()内数値は残存高 ・口頸部 ・体部 ・底部(脚台部)	胎土	焼成	色調・外面 ・内面 ・断面
19 (図11) 1. 師器 甕 2 区10Tr. 3層	口径 14.6cm (残存1/5から回転復元) 頸部径 12.7cm (残存1/5から回転復元) 体部最大径 23.5cm (残存1/5から回転復元) 器高 (20.9cm) 体部はその最大径をやや上半にもつ。口縁部は屈曲して、外上方に伸び、端部は内側に肥厚して鈍い稜で面をなす。 ・外面 ヨコ方向ナデ 内面 ヨコ方向ナデ ・外面 タテ方向ナデ後部分的にヨコ方向ナデ 内面 上半はタテ方向ナデ。下半はヨコ方向のヘラケズリ ・-	直径0.5mm 以下の長石 ・石英・チャート・金雲母をかなり含む。0.5~1mm以下の石英・長石・チャート・金雲母を含む。2~3mmの長石・石英を若干含む。	良好	・淡黄褐色 ・淡黄褐色 ・淡黄褐色
20 (図11) 1. 師器 小皿 2 区11Tr. 3層	口径 11.8cm (残存1/4から回転復元) 器高 (1.7cm) 口縁部は、端部をわずかに外反させて丸くおさめる。 ・外面 ヨコ方向ナデ 内面 ヨコ方向ナデ ・ ・外面 指頭による押圧 内面 ナデ	直径0.5mm 以下の長石 ・石英・金雲母を若干含む。	良好	・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色
21 (図12) 須恵器 杯身 3 区12Tr. 3層	高台部径 11.2cm (残存1/4から回転復元) 底部と体部の境界はやや丸みをもって屈曲する。高台はほぼ垂直に短いものがつく。 ・- ・- ・外面 ヨコナデ(ロクロ回転方向右回り) 高台部はヘラケズリ 内面 ヨコナデ	直径0.5mm 以下の長石をかなり含む。石英・金雲母を含む。	良好	・暗灰色 ・暗灰色 ・暗灰色
22 (図12) 須恵器 高杯 3 区12Tr. 3層	裾部径 10.6cm (残存1/2から回転復元) 器高 (5.1cm) 裾部は柱状部から緩やかに屈曲して開く。裾部上半部に断面三角形の突帯を1条巡らせる。裾端部は面をなし、端面中央部は強いヨコナデによってごくわずかにくぼむが、面の稜線は鋭くない。 ・- ・ ・外面 ヨコナデ(ロクロ回転方向) 内面 ヨコナデ	直径0.5mm 以下長石をかなり含む。 1mm以下の石英をわずかに含む。	良好	・暗赤灰色 ・淡黄灰色 ・淡黄灰色

番号 器種	形態とその他の特徴、調整 器高()内数値は残存高	・口頸部 ・体部 ・底部(脚台部)	胎 土	焼成	色調・外面 ・内面 ・断面
23 (図12) 土師器 二重口縁巻 3区12Tr.3層	口径 16.7cm (残存3/5から回転復元) 頸部径 12.2cm (残存3/5から回転復元) 器高 (9.2cm)	口縁部は体部から大きく屈曲して外上方に伸びた後、段をなしてわずかに外傾して上方に伸びる。端部は面をなす。 ・外面 ヨコ方向ナデ 内面 ヨコ方向ナデ ・外面 タテ方向ハケ後ヨコ方向ハケ(ただし、上半部はタテ方向ハケのみ) 内面 ヨコ方向ヘラケズリ。上端部は指頭による押圧およびナデのみ ・-	直径1~2mm大の石英をかなり含む。1mm以下の石英・長石・金雲母を含む。	良好	・赤褐色 ・赤褐色 淡灰褐色 ・淡灰黑色
24 (図12) 土師器 高杯 3区12Tr.3層	口径 13.6cm (残存2/3から回転復元) 器高 (6.1cm)	杯底部は内彎きみに外上方に伸び、口縁部はやや角度を変えて外上方に開く。口縁端部は丸くおさめる。 ・外面 杯部はヨコ方向ナデ 内面 杯部はヨコ方向ナデ ・- ・-	直径1mm以下の石英をかなり含む。0.5mm以下の長石をかなり含む。金雲母を若干含む。	やや不良	・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色
25 (図12) 土師器 高杯 3区12Tr.3層	裾部径 10.3mm (残存1/4から回転復元) 脚部高 6.8cm	脚部は、柱状部から裾部にかけて緩やかに開きながら下る。裾端部は鈍い稜によって面をなす。裾端部下端は調整時に生じた粘土の重なりが認められる。 杯部と脚部の接合は接合法による。 ・外面 杯底部はナデ 内面 杯底部はナデ ・- ・外面 脚柱状部はタテ方向ナデ 裾部はヨコ方向ナデ 内面 脚柱状部は指頭による押圧(シボリメを残す) 裾部はヨコ方向ナデ	直径1mm以下の石英・長石を含む。0.5mm以下の石英・長石・金雲母を含む。	良好	・赤褐色 ・赤褐色 ・淡黄褐色
26 (図12) 土師器 高杯 3区12Tr.3層	器高 (7.0cm)	脚部柱状部は直線的に外下方に下る。裾部は大きく開くものようである。柱状部と裾部の境界付近に径0.7cmの円形スカシを3方に穿つ。	直径1.5mm以下の長石を含む。1mm以下の	良好	・赤褐色 ・赤褐色 ・淡赤褐色

番号 器種 出土層位	形態とその他の特徴、調整 器高()内数値は残存高 ・口頸部 ・体部 ・底部 (脚台部)	胎 土	焼成	色調・外面 ・内面 ・断面
	<ul style="list-style-type: none"> ・ - ・ - ・外面 ナデ後ヨコ方向ヘラミガキ 内面 柱状部は未調整(シボリメを残す) 裾部はナデ 	石英・金雲母を含む。		
27 (図12) 土師器 甕 3区12Tr. 3層	口径 12.8cm (残存1/6から回転復元) 頸部径 10.0cm (残存1/6から回転復元) 器高 (3.4cm) 口縁部は、体部から大きく屈曲し外上方に開く。端部は内側に肥厚して丸くおさめる。 ・外側 ヨコ方向ナデ 内側 ヨコ方向ナデ <ul style="list-style-type: none"> ・ - ・ - 	直径4mm大の石英を数1mm以下の石英・長石をかなり含む。金雲母を若干含む。	良好	<ul style="list-style-type: none"> ・暗赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色
28 (図12) 韓式系軟質土器 甕 3区12Tr. 3層	口径 34.0cm (残存1/14から回転復元) 頸部径 33.8cm (残存1/14から回転復元) 器高 (3.7cm) 口縁部は体部から緩やかに屈曲して外上方に伸びる。口縁端部は外側に肥厚して外傾する面をなす。 ・外面 ヨコ方向ナデ 内面 ヨコ方向ナデ ・外面 格子目タタキ 内面 ナデ <ul style="list-style-type: none"> ・ - 	直径3mm大の石英をかなり含む。1mm以下の石英・長石・金雲母を含む。チャートをわずかに含む。	良好	<ul style="list-style-type: none"> ・黄灰色 ・黄灰色 ・黄灰色
29 (図12) 土師器 甕 3区12Tr. 3層	甕の把手部である。先端部はやや屈曲して上方を向く。 全体に指頭による押し後、ハケメ(6条/cm)成形を行う。	直径2mm以下の石英・長石・金雲母を含む。	良好	<ul style="list-style-type: none"> ・赤褐色 ・ - ・暗赤褐色
30 (図13) 韓式系軟質土器 甕 3区12Tr. 3層	<ul style="list-style-type: none"> ・ - ・外面 格子目タタキ 内面 ナデ ・ - 	直径1mm以下の石英をかなり含かなり含む。0.5mm以下の長石・金雲母を含む。	良好	<ul style="list-style-type: none"> ・淡黄灰色 ・暗褐色 ・淡黄褐色

番号	形態とその他の特徴、調整	口頸部	胎 七	焼成	色調・外面
器種 出土層位	器高()内数値は残存高	・体部 ・底部(脚台部)			・内面 ・断面
31 (図13) 韓式系軟質 土器 甕 3区12Tr. 3層	・ - ・外面 格子目タタキ 内面 ナデ ・ -		直径1mm以下 の石英を かなり含む。 0.5mm以下の 長石を含む。 チャートを 若干含む。	やや 不良	・淡黄灰色 ・黄褐色 ・淡黄褐色
32 (図13) 韓式系軟質 土器 甕 3区12Tr. 3層	・ - ・外面 格子目タタキ 内面 ナデ ・ -		直径1mm以下 の石英を かなり含む。 0.5mm以下の 長石・金雲 母・チャート をわずかに 含む。	やや 不良	・淡黄褐色 ・淡黄褐色 ・淡黄褐色
33 (図13) 韓式系軟質 土器 甕 3区12Tr. 3層	・ - ・外面 格子目タタキ 内面 ナデ ・ -		直径1mm以下 の石英を かなり含む。 0.5mm以下 の長石をわ ずか含む。	やや 不良	・暗灰色 ・淡赤褐色 ・淡赤褐色
34 (図13) 韓式系軟質 土器 甕 3区12Tr. 3層	・ - ・外面 格子目タタキ 内面 ナデ ・ -		直径0.5mm 以下の石英 を含む。 長石・チャ ートをわず かに含む。	やや 不良	・淡黄灰色 ・淡赤褐色 ・淡赤褐色
35 (図13) 須恵器 高杯 3区13Tr. 3層	口径 14.4cm (残存1/2から回転復元) 杯部・脚部接合部径 2.9cm 脚部径 12.3cm (残存1/2から回転復元) 器高 11.5cm 杯底部から口縁部にかけては、緩やかに内彎しながら外上方に伸びる。口縁部は直線的に外上方に開き、端部は強いヨコナデにより外側に肥厚する外傾した面をなす。口縁部と底部の境界はあまり突出しないが、明瞭な稜線となる。脚部は柱状部から緩やかに屈曲して外下方に広がる。裾部は強いヨコナデによって外上方に肥厚し、内傾する		直径1mm以下 の長石を 含む。石英 ・金雲母を 若干含む。	良好	・明灰色 ・明灰色 ・明灰色

番号 器種 出土層位	形態とその他の特徴、調整 器高()内数値は残存高 ・口頭部 ・体部 ・底部(脚台部)	胎土	焼成	色調・外面 ・内面 ・断面
	面をなす。端面中央はくぼむ。 杯部外面の一部に灰降着がみられ、黒色を呈する。 ・外面 杯口縁部は、ヨコナデ後波状文(10条1単位、9条/cm)を1帯巡らせる。 杯底部はヘラケズリ、上半1/3はヘラケズリ後ヨコナデ 内面 杯口縁部・底部ともヨコナデ ・ ・外面 脚部はヨコナデ 内面 脚部はヨコナデ			
36 (図13) 土師器 高杯 3区13Tr.3層	口径 22.2cm (残存3/4から回転復元) 器高 (8.8cm) 杯口縁部と底部の境界は明瞭に屈曲してわずかに段をなす。口縁部はやや外反しながら外上方に伸び、端部は面をなす。端面中央は強いナデによりわずかにくぼむ。底部内面は上方に盛り上がる。 ・外面 杯部はヨコ方向ナデ 内面 杯口縁部はヨコ方向に粗いヘラミガキ 底部はナデ ・ ・	直径1mm以下の長石・石英をかなり含む。チャート若十含む。0.5mm以下の長石・石英・金雲母を含む。	良好	・暗赤褐色 ・赤褐色 ・暗赤灰色
37 (図13) 土師器 高杯 3区13Tr.3層	口径 14.0cm (残存1/8から回転復元) 器高 (4.0cm) 杯口縁部は底部から緩やかに屈曲して、わずかに内彎しながら外上方に伸びる。端部は丸くおさめる。杯底部内面はやや上方に盛り上がる。 ・外面 杯口縁部はヨコ方向ナデ 杯底部はタテ方向ナデ 内面 杯口縁部はヨコ方向ナデ 杯底部はハケ後ナデ ・ ・	直径1mm以下の長石・石英・金雲母を含む。赤色粒を若干含む。	やや不良	・淡灰褐色 ・淡灰褐色 ・淡灰褐色
38 (図13) 土師器 高杯 3区13Tr.3層	口径 16.8cm (残存1/4から回転復元) 器高 (4.7cm) 杯口縁部は、底部から緩やかに屈曲して、直線的に外上方に大きく開く。端部は外傾する面をなす。 ・外面 ヨコ方向ナデ 内面 タテ方向ハケ後ヨコ方向ナデ ・ ・	直径2mm以下の石英・長石・チャートをかなり含む。0.5mm以下の長石をかなり含む。	やや不良	・赤褐色 ・赤褐色 ・淡黄褐色

番号 器種 出土層位	形態その他の特徴、調整 ・F1頸部 器高()内数値は残存高 ・体部 ・底部(脚台部)	胎 土	焼成	色調・外面 ・内面 ・断面
39 (図13) 土師器 高杯 3区13Tr. 3層	口径 15.0cm (残存1/4から回転復元) 器高 (10.9cm) 杯口縁部は、ほぼ水平に広がる底部から屈曲してほぼ直線的に外上方に伸びる。口縁端部は丸くおさめる。脚柱状部はごくわずかに外反するように外下方に下る。柱状部と裾部の境界付近に径1.0cmの円形スカシを3方に配す。 ・外面 杯部はナデ 内面 杯部はナデ ・ ・外面 脚柱状部はナデ後タテ方向ヘラミガキ 内面 ナデ(シボリメはわずかに残る)	直径1mm以下の石英・長石・金雲母をかなり含む。赤色粒を若干含む。	やや不良	・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色
40 (図13) 土師器 高杯 3区13Tr. 3層	口径 15.6cm (残存1/5から回転復元) 器高 (5.7cm) 杯口縁部は、底部から緩やかに屈曲して直線的に外上方に伸び、大きく開く。口縁端部はわずかに外反して、外傾する面をなす。 ・外面 杯口縁部はタテ方向ハケ後ヨコ方向ナデ 杯底部はタテ方向ハケ 内面 杯口縁部はヨコ方向ヘラミガキ 杯底部はナデ ・ ・	直径2mm以下の石英をかなり含む。0.5mm以下の長石・石英・金雲母を含む。	良好	・暗赤褐色 ・赤褐色 ・黄褐色
41 (図14) 土師器 高杯 3区13Tr. 3層	器高 (7.1cm) 脚柱状部は下半にわずかに影らみをつ。裾部は柱状部から明瞭に屈曲して開く。 ・ ・ ・外面 柱状部はタテ方向ヘラケズリ 裾部はナデ 内面 柱状部は未調整でシボリメをのこす。 裾部はヨコ方向ナデ	直径0.5mm以下の長石・石英・赤色粒を含む。金雲母をわずかに含む。	不良	・淡赤褐色 ・淡赤褐色 ・淡灰色
42 (図14) 土師器 高杯 3区13Tr. 3層	器高 (6.0cm) 脚柱状部はほぼ直線的に外下方に下る。脚部と杯部の接合は挿入法によっており、その際使用した心棒の痕跡が残る。 ・ ・ ・ ・外面 脚柱状部はナデ後タテ方向ヘラミガキ 内面 脚柱状部は未調整でシボリメを残す。	直径1mm以下の長石をかなり含む。石英・赤色粒を若干含む。	やや不良	・淡赤褐色 ・淡赤褐色 ・淡赤褐色

番号 器種 出土層位	形態とその他の特徴、調整 器高()内数値は残存高 ・口頭部 ・体部 ・底部(脚台部)	胎 土	焼成	色調・外面 ・内面 ・断面
43 (図14) 土師器 高杯 3区13Tr. 3層	器高 (4.6cm) 裾部は柱状部から大きく屈曲して開く。 ・ - ・ - ・外面 ヨコ方向ナデ 内面 柱状部は未調整 裾部はヨコ方向ナデ	直径0.5mm以下石英・長石・金雲母を含む。	不良	・黒灰色 ・黒灰色 ・淡赤灰色
44 (図14) 土師器 高杯 3区13Tr. 3層	器高 (5.4cm) 脚柱状部はわずかに膨らみをもちながら外下方に下り、裾部は明瞭に屈曲して開く。 ・ - ・ - ・外面 脚部はナデ 内面 脚柱状部はヨコ方向ヘラケズリ 裾部はナデ	直径1mm以下の長石をかなり含む。1.5mm以下の石英をかなり含む。2mm以下のチャートを若干含む。	不良	・淡赤褐色 ・淡赤褐色 ・淡赤褐色
45 (図14) 土師器 甕 3区13Tr. 3層	口径 6.4cm 頸部径 4.5cm 体部最大径 9.4cm 器高 8.2cm 体部は偏平な球形を呈し、体部と口縁部の境界は明瞭に屈曲する。I線部はほぼ直線的に外上方に伸び、端部は丸くおさめる。体部中央に円形の穿孔(径1.2cm)を行う。 ・外面 ヨコ方向ナデ 内面 ヨコ方向ナデ ・外面 ヨコ方向ヘラケズリ後ナデ 内面 ナデ ・外面 ナデ 内面 指頭による押圧	直径1mm以下の長石・石英をかなり含む。0.5mm以下の金雲母をわずかに含む。	良好	・赤褐色 ・赤褐色 ・不明
46 (図14) 土師器 甕 3区13Tr. 3層	口径 13.6cm 頸部径 11.3cm 体部最大径 19.9cm 器高 (13.3cm) 体部はその最大径をやや上半にもつものであろう。I線部は体部から屈曲して外上方に開き、端部は内側に肥厚してわずかに内傾する面をなす。 体部外面にわずかに煤が付着する。 ・外面 ヨコ方向ナデ 内面 ヨコ方向ナデ ・外面 ナメ方向ハケ 内面 ヘラケズリ ・ -	直径2mm以下の石英をかなり含む。1mm以下の石英・長石を含む。金雲母をわずかに含む。	良好	・赤褐色 ・黄褐色 ・灰褐色

番号 器種 出土層位	形態その他の特徴、調整 ・口頸部 器高()内数値は残存高 ・体部 ・底部(脚台部)	胎 土	焼成	色調・外面 ・内面 ・断面
47 (図14) 土師器 甕 3区13Tr. 3層	口径 27.2cm (残存1/3から回転復元) 器高 (18.8cm) 体部はほぼ垂直に下る。口縁部は外反して開き、端部は面をなす。把手は先端部を外上方に向ける。 ・外面 ヨコ方向ナデ 内面 ヨコ方向ナデ ・外面 タテ方向ハケ 把手は指頭による押圧 内面 ナデおよび指頭による押圧 ・-	直径3mm以下の石英をかなり含む。1mm以下の石英・長石をかなり含む。金雲母をわずかに含む。	良好	・淡黄灰色 ・淡灰褐色 ・淡灰色
48 (図15) 韓式系軟質土器 甕 3区13Tr. 3層	・- ・外面 格子口タタキ 内面 ナデ ・-	直径0.5mm以下の石英・長石を含む。チャートを若干含む。	良好	・赤褐色 ・暗赤褐色 ・赤褐色
49 (図15) 陶質土器 高杯蓋 3区13Tr. 住居埋土	口径 12.7cm (残存1/5から回転復元) 器高 (3.4cm) 天井部と口縁部の境界となる稜線は薄く突出し、やや外上方に向く。口縁部はごくわずかに外側に開く。口縁端部はほぼ水平な面をなし、端面の中央は強いヨコナデによってわずかにくぼむ。 ・外面 ヨコナデ(クロコ回転方向左回り) 内面 ヨコナデ ・外面 天井部はヨコナデの後、2帯のカキメ(4条1単位)を施す。カキメ帯間には同一系体で列点文を施す。 内面 ヨコナデ ・-	直径0.5mm以下の長石を含む。	やや不良	・暗赤褐色 ・暗灰色 ・淡赤褐色
50 (図15) 土師器 高杯 3区13Tr. 住居埋土	口径 17.5cm (残存1/8から回転復元) 器高 (4.9cm) 杯底部から口縁にかけて、緩やかに内彎しながら外上方に伸びる。口縁端部は丸くおさめる。 外面の一部に煤が付着する。 ・外面 杯口縁部はヨコ方向ナデ 杯底部はナデ 内面 杯口縁部はヨコ方向ナデ 杯底部はナデ ・- ・-	直径1mm以下の長石・チャートを含む。赤色粒をわずかに含む。	やや不良	・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色

番号 器種 出土層位	形態とその他の特徴、調整 器高()内数値は残存高 ・口頸部 ・体部 ・底部(脚台部)	胎 土	焼成	色調・外面 ・内面 ・断面
51 (図15) 土師器 直口壺 3区13Tr. 住居埋土	口径 10.7cm 頸部径 7.5cm 体部最大径 15.0cm 器高 14.3cm 体部はやや扁平な球形を呈する。その最大径は中央よりやや上位にある。口頸部は体部から明瞭に屈曲して、直線的に外上方に伸びる。口縁端部は薄く尖る。 ・外面 ヨコ方向ナデ 内面 ヨコ方向ナデ ・外面 ナデ 内面 ナデ ・外面 指頭による押戻後ナデ 内面 ナデ	直径0.5mm 以下の長石 ・金雲母を 含む。石英 を若干含む。	良好	・黄褐色 ・黒灰色 ・淡黄褐色
52 (図15) 土師器 甕 3区13Tr. 住居埋土	口径 17.8cm (残存1/5から回転復元) 頸部径 16.0cm (残存1/5から回転復元) 器高 (14.2cm) 口縁部は体部から屈曲して直線的に外上方に伸びる。端部は外側に肥厚して、ごくわずかに外傾した面をなす。端面中央は強いナデによるごく浅いくぼみがある。 ・外面 ヨコ方向ナデ 内面 ヨコ方向ナデ ・外面 タタキ後ナデ 内面 ナデ	直径1mm以 下の長石・ 石英・金雲 母を含む。	良好	・明黄褐色 ・淡灰褐色 ・暗灰色
53 (図15) 土師器 高杯 4区16Tr. 3層	口径 21.6cm (残存1/10から回転復元) 器高 (6.8cm) 杯口縁部は、底部との境界で段をなして屈曲し外上方に口縁端部で外反して開き、端部は外傾する面をなす。 ・外面 ヨコ方向ナデ後粗いヘラミガキ 内面 ヨコ方向ナデ ・ ・	直径1mm以 下の石英を かなり含む。 0.5mm以下の 長石をかな り含む。金 雲母・赤色 粒を若干含 む。	やや 不良	・暗褐色 ・灰褐色 ・黒灰色
54 (図15) 土師器 高杯 4区16Tr. 3層	口径 15.0cm (残存1/5から回転復元) 器高 (5.7cm) 杯底部はやや内彎しながら外上方に伸び口縁部につながる。口縁端部は不明瞭な面をなす。 杯部と脚部の接合は挿入法によるが、その際使用したと思われる心棒の痕跡が残る。 ・外面 杯口縁部はヨコ方向ナデ 杯底部はハケ後ナデ 内面 杯口縁部・底部ともハケ後ナデ ・ ・	直径0.5mm 以下の石英 ・長石・金 雲母をかな り含む。チャ ートを含む。	良好	・赤褐色 ・赤褐色 ・暗灰色

番号 器種 出土層位	形態とその他の特徴、調整 器高()内数値は残存高 ・口頸部 ・体部 ・底部(脚台部)	胎 土	焼成	色調・外面 ・内面 ・断面
55 (図15) 土師器 高杯 4区16Tr. 3層	<p>裾部径 11.8cm (残存1/2から回転復元)</p> <p>器高 (6.1cm)</p> <p>脚柱状部から柄にかけては緩やかに屈曲して外下方に広がる。裾部は下端でやや外反して開く。端部は面をなす。</p> <p>・ -</p> <p>・ -</p> <p>・外面 タテ方向ナデ。裾端部付近はヨコ方向ナデ</p> <p>内面 柱状部付近は木調整で、シボリメを残す。</p> <p>裾部は指頭による押し後、裾端部をヨコ方向ナデ</p>	直径1mm以下の石英・長石を含む。0.5mm以下の金雲母を若干含む。	良好	・淡赤褐色 ・淡赤褐色 ・淡赤褐色
56 (図15) 土師器 高杯 4区16Tr. 3層	<p>口径 14.0cm (残存1/4から回転復元)</p> <p>器高 (4.2cm)</p> <p>杯底部は外上方に伸び、口縁部は緩やかに角度を変えて、上方に伸びる。口縁端部はごくわずかに外反して丸くおさめる。</p> <p>・外面 タテ方向ナデ後ヨコ方向ナデ</p> <p>内面 ヨコ方向ナデ</p> <p>・ -</p> <p>・ -</p>	直径1mm以下の石英・長石をかなり含む。金雲母を若干含む。	やや不良	・明赤褐色 ・明赤褐色 ・暗灰色
57 (図15) 土師器 甌 4区16Tr. 3層	<p>底部径 11.2cm (残存1/6から回転復元)</p> <p>器高 (7.2cm)</p> <p>体部は平底の底部から屈曲して外上方に伸びる。底部縁辺部に円形の穿孔(径2.5cm)を行う。底径から復元的に見ると、5箇所穿孔したものと考えられる。</p> <p>・ -</p> <p>・外面 指頭による押しの後ナデ</p> <p>内面 指頭による押しの後ナデ</p> <p>・外面 ナデ</p> <p>内面 ナデ</p>	直径1mm以下の石英・長石・赤色粒を含む。金雲母を若干含む。	やや不良	・暗褐色 ・赤褐色 ・淡灰色

Ⅱ 平成4年度市内所在遺跡発掘調査報告

1. 佐田遺跡第6次調査

平成4年4月13日、御所市大字佐田185番地の中西和彦氏より同地の既設建物を取り壊し後、木造住宅を新築する目的で発掘届（文化財保護法第57条の2に基づく）が提出された。同地は佐田遺跡の一画に相当するため、本市教育委員会は、これを奈良県文化財保存課宛に進達、その後埋蔵文化財発掘調査の通知（同法第98条の2）を提出した。

調査は同年7月8日に実施した。工事は当初予定に変更があり、基礎部分は20cm削削するだけとなったので、この部分は調査対象とはせずに、浄化槽部分の調査を実施した。

結果、G. L. から43cmは盛土および攪乱層で、直下がすぐ地山となった。遺構・遺物は全く認められなかった。したがって、既存の建物建築時に遺構は既に削削を受けているものと考えられ、工事には支障はないと判断した。

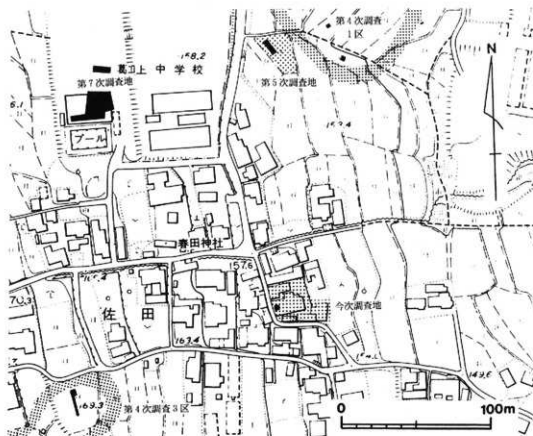


図16 佐田遺跡調査地位置図 (S. = 1/2,500)

2. 「17-A-334」遺跡

①第2次調査

平成4年10月2日、御所市大字柏原247番地在住の中川龍馬氏から、御所市大字柏原418-1に、住宅及び工場を建築するとの目的で、発掘届（文化財保護法第57条の2に基づく）が提出された。同地は『奈良県遺跡地図』第3分冊「17-A-334」遺跡として周知されている。しかし、当該地は既に高さ1m以上の盛土がなされており、住宅・工場のいずれもの基礎工事も、この盛土内に収まるものであった。このような状況から、当市教育委員会は、旧地表下にまで工事の掘削が及ぶと考えられる浄化槽部分を対象として発掘調査を行いたいとの意見書を付して、この発掘届を奈良県文化財保存課に進達し、その後、埋蔵文化財発掘調査の通知（文化財保護法第98条の2に基づく）を提出した。

調査は同年10月16日に実施した。調査対象とした浄化槽部分に、長さ4m、幅2mのトレンチを設定し、現状の地表面から2.25mの深さまで掘削した。結果、地表から1.2mが盛土であり、その下層に旧耕作土（層厚約20cm）、旧床土（層厚約30cm）、暗灰色シルト混砂（層厚約30cm）、及び地山（暗灰色粘土）の堆積が見られた。また、旧耕作土下、約60cmで湧水点に達した。この間、遺物・遺構は全く認められなかった。

今回の調査は、調査面積も狭いなど多くの制約があるもので、遺跡の概略すら知ることもできなかった。ただし、今回の工事では、遺構等の損壊はないと判断された。



図17 「17-A-334」遺跡調査地位置図（S=1/5,000）

②第3次調査

平成5年1月28日、御所市大字柏原415番地の1在住の井上伴之氏から、御所市大字柏原415番地の6に、住宅を建築するとの目的で、発掘届（文化財保護法第57条の2に基づく）が提出された。当該地はもとは水田であった場所に、整地・盛土後住宅を建築したもので、今回の工事はその庭として利用されていた地点に、建物を新築するものである。建物基礎工事は現地表面から50cmの掘削で止まるものであるが、浄化槽部分については現地表面から約170cmの掘削を伴うものであった。そのような状況から、当市教育委員会は、建物基礎部分については遺構に影響がないものと考えて試掘調査を行い、浄化槽部分については発掘調査を行いたいとの意見書を付して、この発掘届を奈良県文化財保存課に進達し、その後、埋蔵文化財発掘調査の通知について（文化財保護法第98条の2に基づく）を提出した。

調査は同年3月19日に実施した。

調査対象とした浄化槽部分に、長さ2m、幅1mのトレンチを設定し、現状の地表面から1.6mの深さまで掘削した。結果、地表から50cmが盛土（1層、明褐色砂礫）であり、その下層に黒灰色礫混土（2層、層厚約40cm）、暗青灰色粘土（3層、層厚約50cm）、及び地山（4層淡褐色粘土）の堆積が見られた。1層及び2層は、従前の住宅建築時の盛土及び整地層であると思われる。いずれの土層においても遺物・遺構は全く認められなかった。なお、建物部分の東辺に長さ4.6m、幅60cm、深さ50cmのトレンチを設定、掘削したが、どの地点でも1層のうちに収まった。

以上のように今回の工事では遺構等の損壊は無いと判断された。

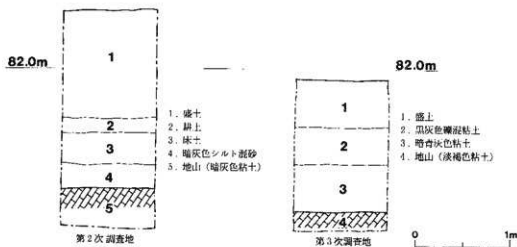


図18 土層断面柱状図 (S. = 1/40)

3. 宮山古墳周堤部

平成4年10月2日、御所市大字室字堤1317番地在住の杉村節・杉村光代氏から、同地の個人住宅解体後新築を目的として、発掘届（文化財保護法第57条の2）が提出された。当該地は宮山古墳の周堤部に相当し、「堤」という字名からもそれが存在した可能性が高いと推定された。

工事は、新築建物の基礎が建物解体後若干の盛土を行い、その面から約50cm程度の掘削に収まるものである。ただし浄化槽部分は深さ1.5m程度の掘削を行うものであった。当市教育委員会は、この発掘届を奈良県文化財保存課に達達し、その後、埋蔵文化財発掘調査の通知（同法第98条の2に基づく）を提出した。

調査は平成5年2月18日に行った。

まず、深さ現地表から1.5m掘削される浄化槽部分についてトレンチを設定し、第1トレンチとした。庭部分のトレンチは、その方向を宮山古墳に向けて、すなわち東西方向に設定し、第2トレンチとした。建物部分では、その西辺部に設定し、第3トレンチとした。

調査地は、宮山古墳の東方形部に位置し、東接する敷地に比べ一段高いことから、調査地の東辺部付近に堤の何らかの痕跡が遺存する可能性が高いと当初から考えられていた。第1トレンチは、その東辺部付近に設定したトレンチであるが、現地表から約20cmは旧住宅建設時の盛土がみられ、その下に暗灰褐色砂質土の堆積があった。当該土層からは中・近世期の土師器・陶器・青磁片などが検出された。また、この深さでは地山はみられなかった。

第2トレンチは、長さ約6.5mを掘削した。最上層は第1トレンチと同様の盛土が20～40cmみられ、その下層は、暗黄褐色粘質土、暗灰色砂質土、黄灰色砂質土、暗黄灰色砂質土が、西側から順に堆積している状況が認められた。遺物は極めて少なく、黄灰色砂質土から土師器細片がわずかに

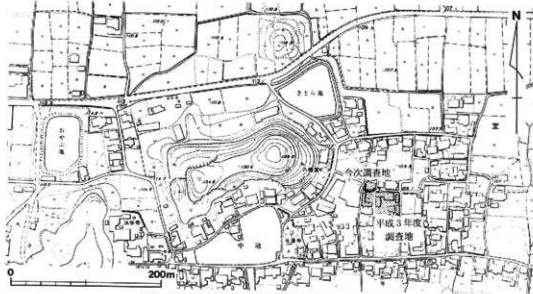


図19 宮山古墳周堤部調査地位置図 (S. = 1/5,000)

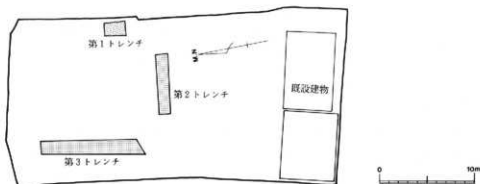


図20 トレンチ配置図 (S. = 1/400)

検出されたに過ぎなかった。

地山(黄褐色砂礫土および粘土)は西から東に緩やかに傾斜しており、現地表から西端で80cm、東端で120cmの深さで検出された。

第3トレンチは長さ約10mを設定、掘削した。このトレンチでは、先の盛土直下に地山が検出された。遺構等は認められなかった。

以上のように、今回の調査では、宮山古墳の周堤の痕跡を直接的に検出することはできなかった。しかし敷地の西辺部では盛土直下(標高111.4m付近)にみられた地山が、第2トレンチでは西から東に傾斜しており、敷地東端部の第3トレンチにおいては現地表下150cmの深さ(標高110.3m)でも検出できなかった。このように、地山が西から東に傾斜している状況が認められ、地山自体が流出しているものと思われる。

ただし、当該調査地に堤が存在したとすれば、調査地と東接する土地との比高差が現状で約1.5m程度あることが手掛かりになるかもしれない。つまり、第2トレンチを設定した箇所が以前から庭として利用されて植木などが存在したため、これ以上東に延長できなかったが、第2トレンチと第3トレンチとの間約2m程の地点で、地山が急に落ち込んでいる可能性がある。あるいはこの地点が堤の外側の立ち上がりになるものかもしれない。

また、今次調査ではこれまで当該地付近では知れていなかった中・近世期の遺物包含層の存在が確認できた。今後の調査・研究の参考資料となろう。

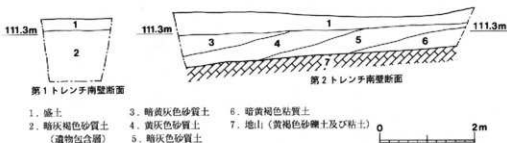


図21 土層断面図 (S. = 1/80)

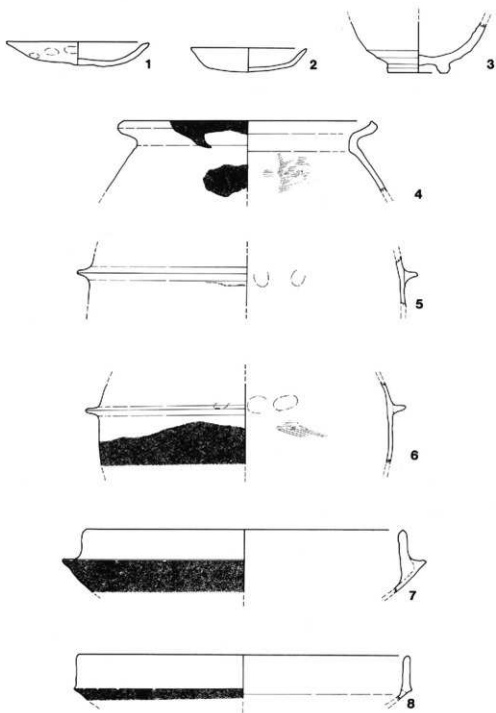


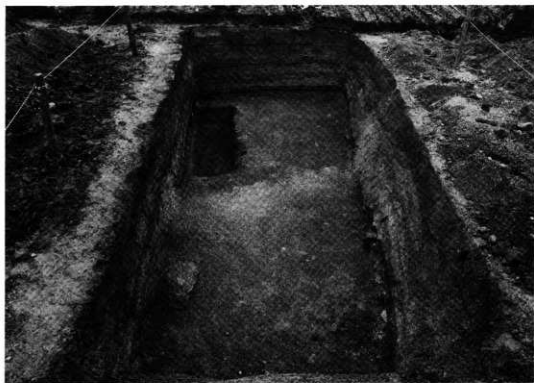
図22 第1トレンチ包含層出土遺物 (S. = 1/3)



1. 3区から巨勢山古墳群を望む



2. 1区第1トレンチ（北から）



1. 1区第2トレンチ (北から)



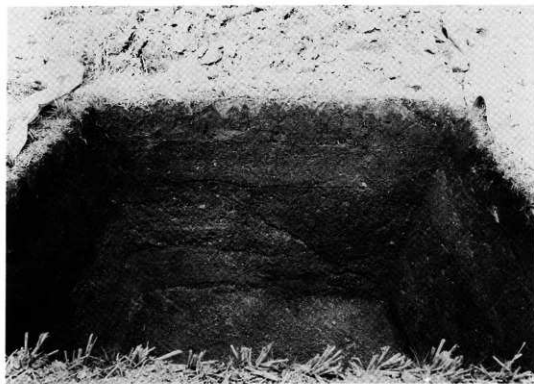
2. 1区第3トレンチ (東から)



1. 1区第4トレンチ (西から)



2. 1区第5トレンチ (南から)



1. 1区第6トレンチ 西壁断面



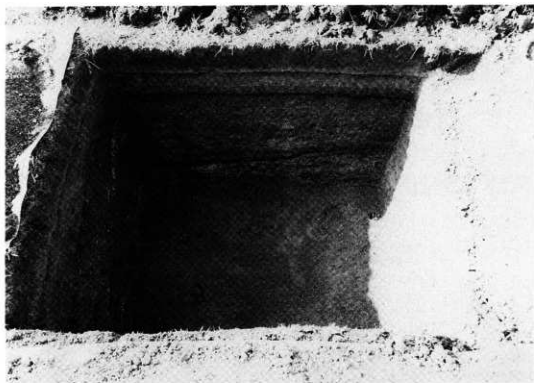
2. 1区第7トレンチ 西壁断面



1. 2区第8トレンチ (南東から)



2. 2区第8トレンチ 西壁北端断面



1. 2区第9トレンチ (東から)



2. 2区第10トレンチ (北から)



1. 2区第11トレンチ (東から)



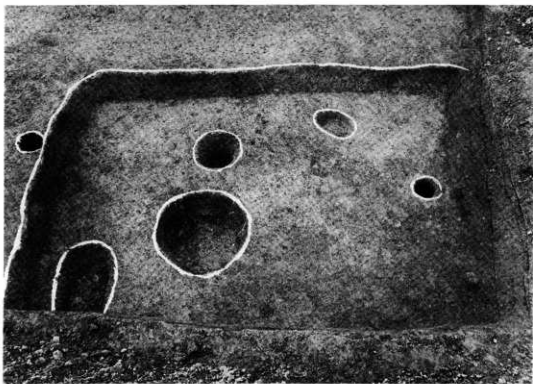
2. 3区第12トレンチ (北から)



1. 3区第12トレンチ 遺物出土状況



2. 3区第13トレンチ (北から)



1. 3区第13トレンチ 竪穴住居検出状況(東から)



2. 4区第14トレンチ(北から)



1. 4区第15トレンチ (北から)



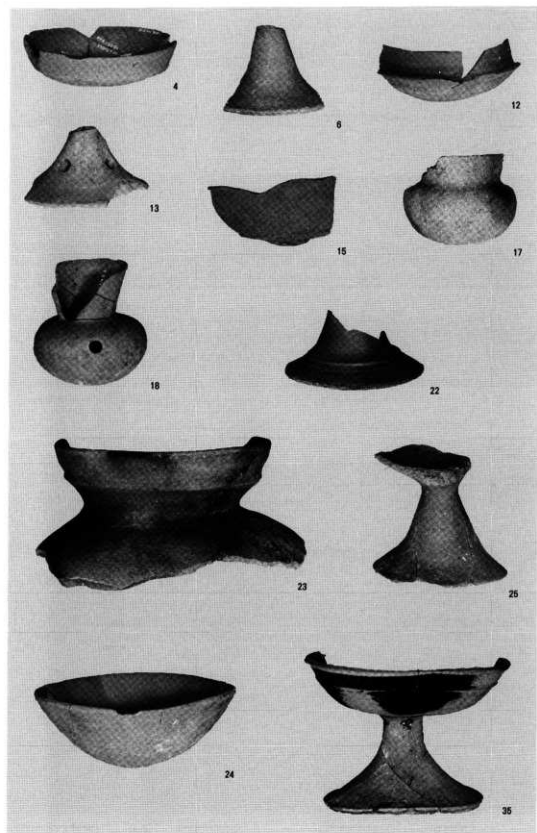
2. 4区第16トレンチ (北から)



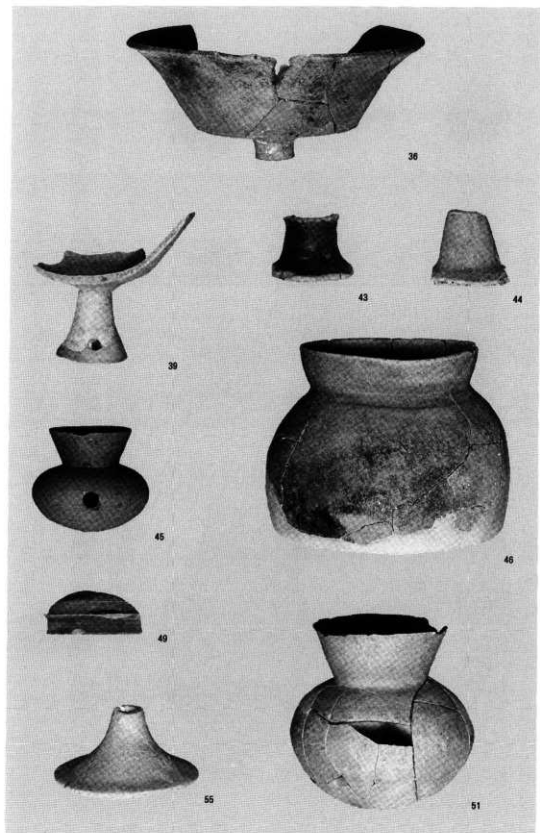
1. 4区第17トレンチ (北西から)



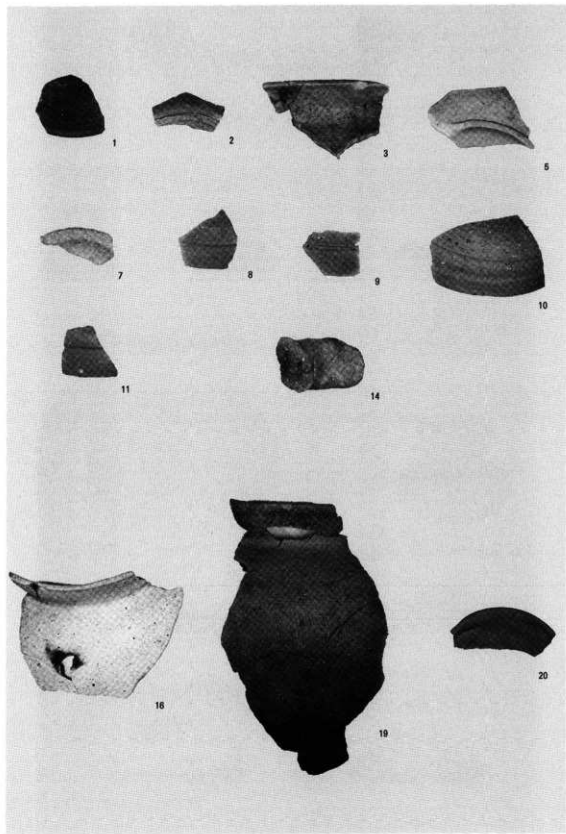
2. 4区第18トレンチ (北から)



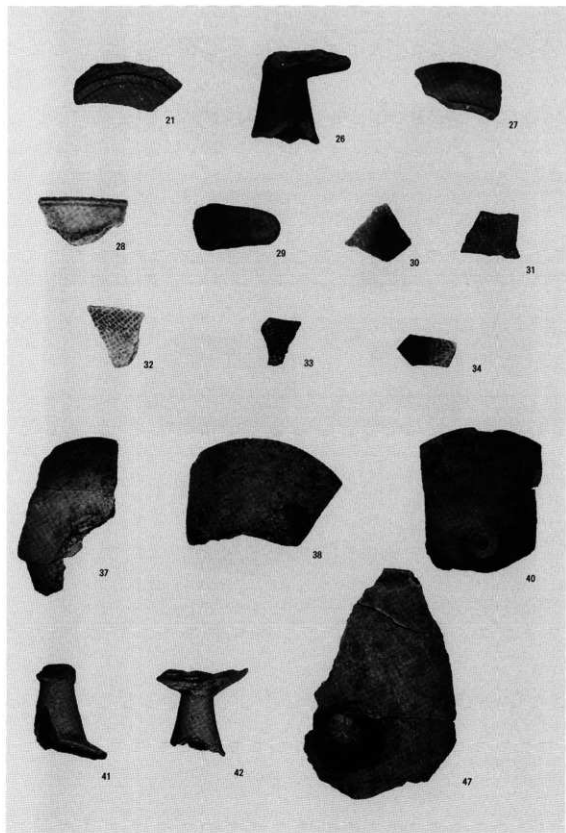
佐田遺跡第4次調査出土遺物1 (S. 1/3)



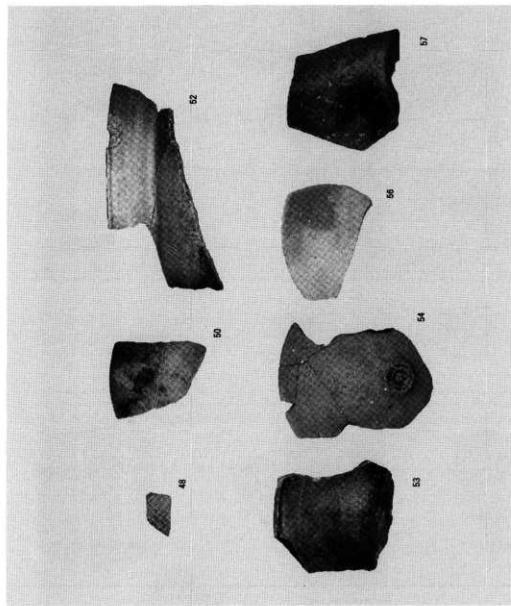
佐田遺跡第4次調査 出土遺物2 (S. ≈ 1/3)



佐田遺跡第4次調査出土遺物3 (S. ㊦1/3)



佐田遺跡第4次調査出土遺物4 (S. ㄹ1/3)



佐田遺跡第4次調査出土遺物5 (S. 号 1/3)



1. 佐田遺跡第6次調査



2. 「17-A-334」遺跡 第2次調査



1. 「17-A-334」第3次調査 浄化槽部分



2. 「17-A-334」遺跡第3次調査 建物基礎部分



1. 宮山古墳周提部 第1トレンチ (南から)



2. 宮山古墳周提部 第2トレンチ (西から)



1. 宮山古墳周提部 第2トレンチ 南壁断面



2. 宮山古墳全景

奈良県御所市

佐田遺跡範囲確認調査報告

附 平成4年度市内所在遺跡発掘調査報告

御所市文化財調査報告書 第16集

平成5年3月31日

編集・発行 御所市教育委員会

御所市三室117番地

印刷 明新印刷株式会社

奈良市南京町3丁目464番地

